
異世界へ放り出された俺の生きる道

葉之蔵隆造

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界へ放り出された俺の生きる道

【Nコード】

N4422X

【作者名】

葉之蔵隆造

【あらすじ】

召喚だか迷い込んだか分からないけど、突然異世界に来た俺、佐野倉正道17歳。

なんで異世界って分かるんだよ？と聞かれたら、胸を張って俺はこう言うだろう。「カエルが空を飛んでいた！」と。

突如異世界に迷い込んだ俺が、何の力も能力も備わってねーじゃねーか！等と己の設定を呪いながら、秘めたる能力（有るのかどうかも分からないが）の覚醒を期待しながら異世界で愛と冒険の日々を・

・・無理だ。生きるので精一杯だろ？普通はさあ

突如過酷な世界へポンと放り出された主人公が、周りの状況に流されながらも持ち前のクソ度胸で生き抜き、やがて・・・な物語です。
（＊小説投稿初心者です。正直展開は登場キャラクター任せです。その為予告も当てになりません（汗）あらすじから大きく逸脱する可能性大です（汗汗）それでも読んで下さる優しい方はありがとうございます）
（喜）

プロローグ

俺は異世界に召喚されたのか？それとも、偶発的に次元の裂け目に入ってしまったのか？

どちらにしても、知らない所（世界）に来てしまったのは、間違いない事実だよな？

俺は頬を抓ってみた。

普通に痛い。

目を開けたまま瞳を擦って『ぎゃああ』とお決まりの又ケ作を演じてみた。

これはかなり痛かった。

口をポカンと開けたまま自失呆然としてみた。

特に何も無い。

驚きのリアクションを一通りこなして、これは夢じゃないかと確認した。

そして、万を辞して目の前の光景を見て一言つぶやいた。

「カエルって・・・空飛べたんだな・・・」

俺の名前は佐野倉正道さのくらまさみち

今朝はちよつと朝寝坊しちまって、幼馴染の早苗に悪態を吐かれながらも全力疾走で何とか学校の正門を通った。

そう、確かに正門を通って学校の敷地内に入った筈だった。

しかし、次の瞬間俺の目の前に飛び込んで来たのは、空飛ぶカエルの集団だったんだ。

しかしまいったね、マンガやラノベじゃ在るまいし何の冗談だコリヤ・・・

そう言えば早苗はどうしたんだろう？

俺の真横に居て、正門を通ったのも同時だったぞ？

もしかして、早苗も一緒にココ（異世界）に来ちまったんじゃないか？

俺は辺りをキョロキョロと探して見るが、それらしき人影は見当たらなかった。

俺は膝の高さ位ある草（なんの草だこれ？真っ赤なミニひまわりみてえ）を掻き分けて辺りをウロウロしてみる。

もしかしたら気絶でもしてるんじゃないかと思ったからだ。

グルグル、グルグル、グルグル、グルグル、グルグル、グルグル……

小一時間、辺りをグルグルしてみたが早苗は見つからなかった。

「ふう〜、まっ！取り合えず早苗は居ないって……」

さてよ？俺は早苗に居て欲しかったのか？それともこんな冗談めいた事態に巻き込まれていなかったのを確認して安心したかったのか？人間あまりに現実離れた現象に遭うと、冷静さを失い錯乱すると聞く。

俺は気が動転しているのか？

空を仰ぎ見た。

相変わらずカエルがゲコゲコ言いながら、空を飛んでいる。

カエルって食えたよな……

ああ……やっぱり気が動転しているな俺、さっきから俺の思考って、確信に触れない事ばかりだ。

こんな時早苗が居てくれたら……いや落ち着け俺、早苗が居なく

て良かったんだ。

「しっかりしろよ！！！！」

俺は自分の胸をドンツ！！と思いつき叩き、気合を入れる様に持てる最大ボリュームで叫んだ。

「きゃああああ！！」

すると俺の前方約50m付近で誰かが悲鳴を上げて立ち上がった。こっちに高速でブンツ！！と首を振る人影を見る。

一瞬、早苗か？と思ったが違った。

歳の頃は14.5と言った所か、赤茶けた髪をポニーテールに纏めた小柄な女の子だ。

端正な顔立ちは一目で美少女とわかる。

背は150cm位か、ダボツとしたワンピースに赤いカーディガンを羽織っていた。

首からはネックレスを下げている。

ネックレスの先、胸の辺りにブルーダイヤだろうか？見事な輝きを放つ青い宝石が付いていた。

銀色の見事な装飾が縁取られている。

何か彫ってあるな『may』メイ？

「誰なの？！」

女の子は酷く警戒してる。

だが、俺はそんな彼女の問いかけに答えられない程、宝石を見た時読めた『may』の文字に集中していた。

何で読める？

俺と彼女の距離は約50m。

目測だからもうちょっとあるかもしれない。

姿形ならともかく、何故宝石の縁に彫ってある文字まで見える？
ミ
リだぞあの文字。

姿形は良ししよう。

宝石の縁の装飾も良ししよう。見える事もあるだろう。

だが、普通ミリ単位で彫られた、書かれたじゃなくて『彫られた』
文字を見える人間が居るだろうか？

俺はもう一度目を凝らして宝石の縁にある文字を試してみる。

【may】

さっきよりも良く見えた。

「いやああああああ！！ 助けてえええ！！」

「！！へっ？！」

女の子が突然悲鳴を上げて逃げ出した。

なんで？どうして？俺の頭がこんがらがる。

あつ、そうか、突然大声を出して現れた男が、自分の問い掛けにも
反応しないで胸元を凝視してれば、そりゃ逃げるわな・・・

俺は頭をボリボリ掻いて一瞬反省するが、まあ仕方ないと弁解を諦
めた。

女の子の姿は、既にココからいなくなってたからだ。

追いかけて弁明しようとしたら、きつと嫌な展開になるはずだ。

別世界に来て初めて会った人が、親切に自分を助けてくれる話なん
て、物語の中だけの話だ。

そう思いその場で空を見上げて独り言を言ってみた。

「カエルが空を飛んでるなあ」

プロローグ（後書き）

修正してみました。

多少読みやすくしたつもりです^^；

第一話 流される俺の道

あゝ、これからどうしたら良いかねえ？サバイバルのスキルなんて都合良く持ってねえしなあゝ。

金は・・・小銭しかねえ。まあ、当然使えっこねえよな。

あつ、そうだ、こんな時はまず所持品チェックだ。

つて、遅刻寸前で取る物もナントヤラで手ぶら全開だったから何も無しつと。

どうすつか？何とかなるか？

いやいや、まてまて、考え無しに動いてる奴はデットエンドだ。

映画の主人公じゃあるまいし、運任せのご都合主義なんか頼る訳にはいかん。

そうだ！よく次元突破した時に何らかの能力に目覚めた・・・つて早速頼つてるよ俺っ！

暫くボーっとして、何気なくポケットの小銭を数える。

100円玉が四つに50円玉が一つ、後は十円と一円・・・

シュッ！

頭を抱えて一人でブツブツ言いながら悶えている俺の横を、何かが通り過ぎた。

わっ！小銭落とした。

「なっ！なんだあ！？」

後ろを振り向いた。地面に矢が刺さってる？

「動くな！ゆつくり手を上げてこちらを向け！掌をこちらに向けてな！」

声の方向へ振り向いた。勿論手など上げてない。

「へ？」

警告無視・・・

ザシュ！ザシュ！ザシュ！

三本の矢が俺の回りの地面へと突き刺さる。一本足に掠った。これから人の話はよく聞こうと思った。

「ッ！」

「ゆつくりと言ったはずだ！・・・後、手を上げる。ともな！」

俺は今度こそゆつくりと手を上げる、勿論掌を見せる事も忘れない。声の主は屈強な体を持つ20代前半の男だ。

背は俺と同じ180cm位か、着込んでるのは皮の鎧だな。腰に多分80cm位の剣を携えてる。

ショートソードってヤツか？よく小説なんかだと冒険者とか傭兵とか言われる部類のヤツが持つ剣か？

その他に声の男の後方に四人の男達がいた。

皆同じ格好をしてるって事は、やっぱ傭兵の類かなんかだろう。

警告を発した男のすぐ後方に控えてる三人は弓持ちか、既に矢を絞込み俺に向かって照準を付けている。

残りのもう一人は弓持ちの更に後方に位置している。

周りを索敵中か・・・
さてどうするか・・・

一番愚かなのは突撃だな。

俺から男達まで50mはあるし（なんで接近に気が付かなかったんだろう？）懐に飛び込む前に矢の餌食だ。却下。

次の手は一目散に逃げる。

これも却下だな。一番目と同じ末路だろう。

後は・・・矢を避けながら剣を持った男二人を制圧。

残りの三人を順次迎撃って・・・俺はこのスーパーヒーロだあ？無理無理、こりゃ駄目だ・・・せめて殺されない事を祈りつつ降伏しよう。

と、どこかで見た色ボケ東大生の如く0.3秒で思考を纏めると、俺は降参のポーズをとった。

「はいはい、降参、こーさんだよっ！・・・ってか俺何か悪い事した？」

「女の子を襲っただろ？」

「へ？女の子？あのメイって娘か？そりゃ誤解だ、誤解。そりゃ」

脅かしたのは悪かったけど、と続けさせて貰えず言葉を遮られる。

「貴様、なぜ妹の名を知っている？」

あら・・・アホか俺は、警戒を増幅させてどーする！

「怪しい奴だな。貴様は何の目的でココにいる？」

あゝあ、死んだかなこりゃ？ってか、襲ってもない女の子のせいで死ぬのかよ！襲ったときゃ良かった。

じゃねー、考えろ！こんな異国どこるか異世界でしんでたまるかつの！

「ちよつ、ちよつと待つてくれ！俺は佐野倉政道つてんだ。ここへは道が分からずに迷い込んだだけ、決してアンタの妹を襲った訳じゃねえ。ちよつと大声でストレス発散したら脅かしちまつただけなんだ」

一気に捲し立てた。

信じてくれと真っ直ぐに相手の目を見る。

数秒？数分？数時間じゃねえ？死が眼前に迫っている俺の時間の感覚が酷く歪む。

目を逸らさず相手の目をじっと見る。じつと・・・あつあれ？

俺は何か疑問符を浮かべる。

視力が普通に戻ってる？さっきあんだだけ常識はずれによく見えていたのに・・・

とと・・・今はそんな事考えてる場合じゃねえな・・・

「・・・嘘を言ってる眼、でな無さそうだな」

YES！！心の中でガッツポーズを取る俺。

「テレウス！」

弓を構えている一人が叫ぶ。

「そいつ、嘘を言ってるのかもしれんぞ！？ガデムの手下だったらどうする？！」

なんだコノヤロウ、余計な事言つなよ。

せっかく信じて貰えそうなのに。

と心の中でジャブ、ストレートを弓持ちの男へと繰り出す。

「俺の目が信じられないと？自慢じゃないが、俺の人を見る目は確かだよ」

テレウスと呼ばれた男は仲間にそう言うと、今度は俺の方へと話し出す。

「だが、貴様が妹の名を知っていた事。説明はしてもらっぞ？」

なんかどつかで見たようなパターンになって来てはいませんか？フラグかなんか発動した？チョットだけ調子に乗ってみようかな？

「ああ、それは勿論。けど・・・」

「けど？」

「俺腹ぺこで・・・」

その場にヘナヘナと座り込んでみる。

キョトンとしたテレウスがいる。いけるか・・・？

「フフ・・・フフフ、ハーツハハハハ・・・こいつ、結構良い度胸してやがる！良いだろう、飯ぐらいは食わしてやるさ。だが、手枷は付けさせて貰うがな」

グッジョブ！俺は何とか生き残ったようだ。

生きるって大変だなあ・・・と、つくづく思う俺だった。

俺は手枷足枷口枷を付けられ、更にはロープでグルグル巻にされて、馬に乗せられ連行されていた。

テレウスの奴、何が『手枷は付けさせて貰うがな』だ。

俺は何か？そんなに危険な生物か？虎か？獅子か？ええい！これは抗議だ！人権侵害だ！断固として抗議しなきゃならん！

「ふふえふあふあふいふあ？ふおんふあふいふいふえんふあふえいふふふあ？」

「ん？静かにしろマサミチ。この辺は魔獣が出るんだ。魔獣に出くわしたら見捨てるぞ？死にたいか？」

「ふいふいふあふふあふいふあふえん（死にたくありません）」
「なら大人しくしている」

通じた？！テレウス・・・恐ろしい奴。
しかし魔獣と来たかよ。

この分じゃ魔法とかもあんじゃないのか？ファンタジーの世界まんまだな・・・

テレウスの馬の後ろに乗せられて、カッポ、カッポ、カッポと馬に揺られて10分で着いた。村、近っ！

そりやまあそうか、女の子のメイが動ける活動範囲だもんな。

ん？でも待てよ？テレウスが魔獣が出るって言ってた場所、通って来たよな？そんな所をメイが一人で往来してるのか？

んんんー・・・・・・？？

馬の背でグルグル巻状態の俺が悩んでいると、何時の間にか村の中央迄来ていた。

「お兄ちゃん！」

聞き覚えのある声に首だけグイッと向けると、メイが走り寄って来た。

おおー、俺の命綱。

テレウスが馬から降りると、メイが兄の前でもジ子になりながら『お帰りなさい』と頬を赤らめてる。

はいはい、お約束はそこまでにして、早く俺の誤解を解いてくれ。ついでに縄も解いてくれ。

やっと開放されると思った矢先に、メイの口からとんでもない言葉が飛び出し俺を驚愕させる。

「ああー！お兄ちゃん、強姦魔を捕まえくれたんだね！」

はああああ？？？？

今なんて言った？ちょっと聞き取れなかったのもう一度言ってくれないかな？

コメカミの辺りが怒りでピクピク揺れている。

テレパシーでも持っているのか、メイは俺の要望にすぐさま答えてくれる。

「凄いねお兄ちゃん、こんなエッチな強姦魔を捕まえちゃうなんて、この強姦魔に襲われた時は、もうだめだーって思ったんだよ？犯されちゃうんだって思って泣き叫んだのに、この強姦魔はしつこく追い回して・・・少し胸を触られちゃったけど・・・私でも逃げるので精一杯だった強姦魔を簡単に捕まえちゃうなんて・・・お兄ちゃんって天才だね」

・・・・・・はああ？？！！

なんだあ？！この女あ！！頭イカレてんじゃないのかあ？！

誰が強姦魔だつて?! 誰が襲つたつて?!

何出鱈目ぬかしとんじゃゲオラア!!

お前なんてただ可愛いだけのチンチクリンじゃねーか!

頼まれたつてお前なんか襲わねーよ!

ちよつと早苗に雰囲気似てるななんて思った俺の淡い感情を返せゴ
ラアッ!

胸触つたつて? 無いだろが! 何処をどー見たら乳なんて見つかるん
じゃ! お前の乳を探すなら、父を探しあwse d r f t g y ふじこー
!!!!!!

最後の方は怒り過ぎて意味も分からんし言葉も分からん様になつて
る。

まあ実際も口枷されてるので「ふごふご」言ってるだけで言葉にな
つてないんだけどな。

「負ゴー負ゴー負岐阜がふぐ負が画布が」

「何コイツちよつと煩いキモイ」

俺のコメカミから血の噴水を出して良いですか? そしてその噴水で
このバカ女を溺死させて俺も死にます。さようなら。

「こらメイ、出鱈目言つたらダメだ。マサミチはお前を襲つたりし
てないつて言つていたぞ?」

テレウス様エライイイ!!

こんな感動異世界で味わうなんて、一生貴方に付いていきます!

「でっでもお」

コラ、メイ、お兄様の言う事を聞きなさい。嘘を吐きましたって認

めなさい。

「まあ聞け、メイ。まだハッキリした証拠は無いが、恐らくマサミチは魔帝国の密偵だと俺は思ってる。でも、多分根はいい奴っぽいから、騙されて協力してるって感じだな」

前言撤回。激しく撤回。速やかに全てを撤回だコノヤロウ。

なんだそりゃあ？何処でどう誤解したらそうなるんだあ？？
誤解が五十階ぐらい上ってるやないかあ

妹が妹なら兄も兄だ。

駄目だ・・・怒る気力も無い・・・

兄弟そろってバカのエレクトロニックパレードだ。

今日はもう寝よう。

取り合えず殺される心配は無いだろ。

疲れた・・・寝て何もかも忘れたらもしかして元の世界に戻れるかも知れない・・・ああ・・・都合の良い思考しか取れない・・・
お休みなさい

そのまま俺は気絶した。

人間怒りで気絶出来るんだな・・・今日俺は新しい発見をした。

「ん？マサミチ？おいマサミチ？・・・気絶したのか。信憑性が高まったな」

「お兄ちゃん、それでどうするの？ソレが密偵だとして、ココじゃ碌な取調べも出来ないよ？」

「ああ、それに付いては俺に考えがある。村長から盗賊団討伐の為の援軍要請をしていた、聖アレサレナ王国から今朝、援軍要請受諾の親書が届いたんだ」

「そうなんだ！じゃあ！」

「そう、後3・4日もしたら聖王国の聖騎士団から、聖騎士様数十名が派遣されて来るはずだ。聖王国の誇る聖騎士団の精鋭ならば、盗賊団など直に討伐出来るだろう」

「そうよねっ！これで村も安心だねっ！あっ、じゃあ、その後お歸りになれる聖騎士様方と一緒にアレを聖都まで連行するのね？」

「そうだ。聖都で取り調べを受けさせ、魔帝国が何を調べてたかをマサミチから聴き出すんだ。まあ、大体想像はつくがな・・・」

「凄いお兄ちゃん」

「フフ・・・それと、マサミチも出来たら助けてやりたいんだ。マサミチの着てる服。この真っ黒な服はおそらく魔帝国領内の学生服だと思う」

「えっ？・・・じゃ、じゃあマサミチって学生なの？」

「おそろくな・・・歳もお前と同じ位だと思うぞ？身体は大きいが、顔が幼すぎる。多分魔帝国諜報部の連中に唆されたんだろう。いや、もしかしたら人質を取られているかもしれん」

「そっそんな・・・」

「奴らには修行中、魔帝国領内にあるホウガイと言う町で出会った事がある。ちよつとした事件で諜報部の奴らと戦ったんだが、追い詰められた奴らは自国の民を人質に立て籠もったんだ。俺が突入した時、奴らは人質を躊躇無く殺しやがった。まだ5歳の少女をな！」

「酷い・・・」

「魔帝国の軍部は腐ってるが、民はそんな事は無かった。少なくともホウガイの町の皆は暖かかった。だから、きつとマサミチもやむにやまれぬ事情で仕方なく軍部に加担させられてるに違いない」

「そうよ！きつとそうだわ！お兄ちゃんマサミチを助けてあげて！」

「ああ、あの時あの子を助けられなかった分、マサミチは必ず救ってみせる」

夢の中にいる正道は涙を流しながら自分の運命を呪っていたという。

第二話 何処へ向かう俺の道

夢を見てる。

嫌な夢だ。

酷く気分が悪い。

赤黒い色で染められた空間に俺は裸で立っていた。

嫌な臭いだ・・・肉の、脂の焼けた様な臭い・・・それと、これは血の臭いだ。

辺りを見回す俺の視界を、ぼんやりとした赤い、まるで血のような霧が視界を遮っていく。

「人影・・・？」

赤い霧の中に、二つの人影が重なっているのが見えた。

俺は目を顰めて人影の正体を探ろうと、赤い霧を振り解く様に手で霧をかく。

すると、人影の顔の部分だけがゆっくりクリアになってくる。

目を凝らすと・・・早苗だ！早苗がいる！

早苗はぐったりとした感じで瞳を瞑ってる。どうしたんだ？何があったんだ早苗！

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

声が出ない。

いや、言葉にならないのか？まるでTVの音声をカットしたように発した声が言葉にならなかった。

良く見るともう一つの人影が早苗を抱きかかえている。

お前は誰だ！？どうして早苗を抱いている！？早苗に何をした！？俺は必死に早苗達に近寄ろうと全身の力を振り絞り、全力で前に進

もうとする。

が、どうしても身体が前に進まない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

なんだ？男が何を言っている？

・・・男？影しか見えない物をどうして男って思えるんだ？何がどうなってる！

ちくしょう！！早苗を放せ！！どうして俺の身体は動かねんだ！！クソツタレが！！

俺がもがいてる間に早苗の顔の部分の赤い霧が濃くなってくる。それと同時に二人の影も薄くなって、消えてしまった。

「何だよちくしょう・・・・」

声が出る。

「早苗・・・早苗・・・」

拳を握る。握った拳から血が滲み落ちた。地面に血が落ちると同時に

「ちいっつきしょおおおおおおお！！！！！！」

俺は力一杯吼えた。

ガバアアア！！

蹴飛ばした毛布が天井にぶち当たって、再び俺の身体に頭から被さった。

バサアアアツ！

毛布を跳ね除けてキョロキョロと辺りを見回すと、石を重ねた作りの壁が冷たく四方を囲んでいた。

「ハア、ハア、ハア、ハア、ハア……」

肩で息をする。

どうにも息苦しい。

呼吸が落ち着かない。

まずい！これ過呼吸だ！！

俺は辺りを見回して毛布を見つけると、口の辺りに少量空間を作つてあてがった。

「ハアハアハアハアハア……ハア……ハア……スー……ハー……スーハー……」

呼吸がだんだん落ち着いてくる。

普通に呼吸できる様になって、改めて周りを見回すと足音が近づいて来るのに気が付いた。

「ん？おお……気が付いたか」

テレウスだ。

「・・・飯」

「ん？」

「飯！食わしてくれんって言ったよな？」

不機嫌をあらさまに態度に出して俺は言った。

「おお、そうだったな。少し待ってろ、メイに持って来させるからな」

テレウスは少し罰が悪そうな表情になって、足早に階段を駆け上がつていった。

「ツチ、そんな表情すんなら、俺の聴こえない所で話せてんだ。KY兄貴」

俺は昨日の事を思い出してむかつ腹が立ったが、昨日よりかは幾分ましだ。

あのKY兄妹は許せんが、俺を助けたいと言ったテレウスの言葉に偽りは無いだろう。

それが幾分俺の感情を緩和していた。
だからって腹が立つのは変わりねえんだけどなっ！・・・腹も減ってるし。

そう言えば一昨日の夜から水も口にしてねえじゃんか！そりゃ夢見も悪いやな・・・
と思いさっきの夢を思い出してみる。・・・。。。。。。??

あれ??あれ???

どんな夢だっけ?・・・めっちゃめっちゃ胸糞悪い夢だった事は憶えてる。

ってかそれだけじゃ憶えてる内にはいんねーか・・・

俺は頭をボリボリかいて、憶えて無いなら仕方ねえ。

っと頭を切り替えて今後の事に思考を切り替えた。

忘れた夢程思い出すのに困難な物は無いからな。

んじゃま、まずは現在の状況確認からだ。
まず・・・

「はあゝい、マサミチっ!」

「どわっ!」

「なによゝ、驚いて変な声出してえ。あつ、壁に向かってるって事はあゝ」

メイだ。何処まで俺の邪魔をするつ・も・り・・・?
ん?何でコイツ、ニヤニヤして・・・?・・・!!

「・・・むふふうゝ・・・もしかして一人エツ「してねえよ、お前じゃ有るまいし」チチチチチーっ!」?

「チっ!!わっわわ私はそんな事しないわよっ!!!!」

「エツチ!変態!!スケベ!!痴漢!!強姦魔!!!!」

物凄いうろたえようだな。もしかしてホントにしてるのか?ってか、

「そうだった!!テメーよくも俺を強姦魔等と根も葉もねえ出鱈目言ってくれたなあ!俺が!いつ!何処で!何時何分何曜日!テメエな

んかの乳揉みし抱いたんだよ!!」

「なななななな、揉みし抱いたなんて言って無いもん!! あったまきた!! 人がせつかくアンタの悲惨な境遇に同情して、仲良くなつてやるうかと思つてご飯持つて来てやったのに!!・・・飢え死にしちゃえ!!」

食事の乗ったトレイを離れた所に置いて、ドタタターと駆け出していった。

スープの湯気が千里の彼方に・・・

しかし、よくあんだけ上から目線で物言えるよな・・・てか・・・俺の飯・・・

ぐうつうつうつうつうつうつうつ

デケエ腹の虫だなオイ。

「ふん! あんな奴助けてなんてあげなくていいわよっ! ホントもー最低!!」

「メイ!・・・どうだった? マサミチの奴。少しは打ち解けたか?」

テレウスが正道を捕らえてる牢屋から出てきたのを見ると、駆け寄つて来て声をかける。

「お兄ちゃん!!・・・ふええええん・・・」

「どうした？メイ？」

メイが大きな瞳に涙を目一杯溜めて（勿論演技）テレウスに抱き付いて、見事に割れた腹筋に頭をスリスリ、頬をスリスリ擦りつけると、上目遣いにテレウスを見て、

「・・・ぐすっ・・・マサミチの奴が・・・食事を手渡そうとしたら・・・ぐす・・・私の手を掴んで・・・羽交い絞めに・・・ひつく・・・そして・・・私四つん這いにして・・・大事な所を・・・うわーん」

どうやってたら鉄格子を挟んで四つん這いに来るんだ？

等と考えながら、テレウスはメイを慰める。

「そうか、メイ程の器量ならば、と思ったんだが・・・駄目か。マサミチを懐柔出来れば、労せずとも魔帝国の情報を入手出来ると踏んだんだがな、何か別の策を考えねばな・・・」

メイの頭をヨシヨシしながら、テレウスはワザとがっくり肩を落す仕草をした。

この兄妹、詐欺師で食っていけるんじゃないか？

つとこの場面を正道が見たら思うだろう。ただし、超勘違い癖が無ければ・・・だが。

「・・・?!・・・ぐす・・・ううん・・・お兄ちゃん、私、頑張るわ！あの性獣だって人の子！お兄ちゃんの策を、メイは立派に成功させて見せるからねっ！・・・その代わり、上手くいったら・・・」

頬をほんのり朱に染めてメイは兄を見る。

「ああ、一緒に聖都に連れて行ってやる」

メイの瞳にキラキラと輝く星が見えた。様な気がする。

いくら牢屋の近くでも昼間は結構人が通る。

しかも道のど真ん中で行われる兄妹ショーに、村人のやれやれと言う視線が向けられるのは言うまでも無かった。

ぐうつうつうつうつ

「ああゝゝゝ腹ヘツタあゝああああ！クソツ！飯食わせええええ
！！」

そこに見えるが決して手の届かない食事の乗ったトレイを見て、究極の拷問を受けている気分になってくる。

「つてかあゝゝゝなんのプレイだよこれえゝゝゝあゝもう駄目だ
あゝゝゝ死ぬゝ」

ばたりと鉄格子に向かって倒れた自分の指にコツンと何かが当たる

感触があつた。

ん？と頭を起こすと、そこには少し冷めた食事が乗ってる銀のトレイがある。

「メシイー！！」

正道は物凄い勢いで食べ物に運び、喉を豪快に動かして胃に食物を運ぶ。

食事は決して豪華な物では無かったが、ちゃんと肉もあり、スープにも野菜の具が入ってる。

味も悪くない。量もそれなりにあつた。

実はこれ、本来の囚人に与える食事ではない。

正道の懐柔にテレウスが特別に用意した食事である。

生活の殆どを自給自足で賄うこの村は、貧しくは無いが、決して贅沢を出来るほど裕福ではない。

今日、正道に与えた食事は、村の住民からすれば、特別な日に出す食事クラスの豪華さがある。

勿論狩で大物を仕留めれば、村民も御馳走にありつけるが、何時もそんな幸運がある訳では無い。

テレウスは優秀な戦士であると共に優秀な狩人でもあつた。

その為、他の家よりかは多くの蓄えを持っている。

正道に与えた食事は、テレウス達も普段気軽に食べられる物では無かったが、食べられない事も無いので正道に出したのだ。

だが、これで懐柔出来れば安い物だ。

と、テレウスは思っているが、事柄と全く関係ない正道に与えて懐柔出来てもテレウスの欲しい情報は手に入らないのだから、捨てているのと同じである。

結局テレウスの勘違いで一人損をするのである。痛い話だね。

さて、正道の食事も終わった頃だ（閑話休題）

「すごい食べっぷり・・・」

メイが口をポカーンとあけて俺の食事の風景を眺めていた。
その口に詰め物をしてやるか！

と下品な思考を浮かべる位は余裕が出てきたな。
食事が終わり一息つくと、

「・・・□・・・あいてるぞ」

と突っ込んでみた。

「・・・・・・はむっ！」

顔を赤くして口を手で塞ぐと、マシンガンの様な罵りが・・・飛んでこなかった。

身構えた俺は『？』を多数浮かべると、口を塞いでるメイを見る。
するとメイは、静かできて、それでいてどこか憂いを見せるような目で俺を見ると、静かな口調で話をしだした。

「・・・あ、あのさ、さっきはごめんね」

俺はズサアツとその場から、逃げ場の少ない牢屋をあとずさる。

「もっもう！そんなに警戒しないでよ・・・悪かったと思ってる。
本当よ？」

俺は言葉を発つさない。だっ騙されるもんか！可愛い顔して可愛い口調で、俺をそんな可愛い目で見えるな！

「ホント言うとなっ・・・最初にマサミチに会った時、ビックリしたんだけど・・・黒い髪に黒い瞳が日にキラキラ輝いててキレイって思ったの」

ナンノカンユウデスカ？ワタシハカミヲシンジマセン。

「それで、それでね？勇気を出して『誰？』って聞いたのに、アナタは私をじっと見てるだけ、その黒水晶の瞳でじっと見られてたら吸い込まれそうな感じになっちゃって・・・そしたらすつごく怖くなっちゃたの！・・・その・・・あの・・・私がアナタに・・・支配されちゃいそうで・・・」

頬を真っ赤にして俯くメイ。

その姿を見た俺は、頭の中から今までのメイの言動や態度、更にはメイのテレウスに対する痴情の態度まで一時的に消去された。

はい、俺はバカです。助兵衛に改名します。きつと後になって後悔するのは目に見えてます。だけど今のメイを見て逆らえる男がいたら尊敬します。いやマジで。

俯いたメイは、更に追い討ちをかけるべく、股の中央に手を寄せて、モジモジ腰を揺らしながら鉄格子に近づいてしゃがみ込んだ。

うおっ？！メイの奴、結構胸あんじゃん！着やせ？着やせですか？なぜか赤いメイド服に酷似した服の、これまた何故か胸元が開いた着こなし。

何時の間にか俺はメイの傍に寄っていた。

そう言えばメイの事こんなに近くで見るのは初めてだ。

しゃがみ込んだまま俺を見上げるメイの瞳は、淡く蒼味がかってい

て、赤茶けた髪は良く見ると艶があり、角度によっては朱炎の様相を見せる。

小顔のメイの鼻は小さく、ピンクの唇もこじんまりしているが、ぷくつと柔かそうだ。

華奢な肩は、抱いたら折れてしまいそうでいて、女性特有の柔かさも持っている（様な気がする）

小柄ながらも、胸はその存在を主張していて（開いた胸元を見ると）腰の括れも僅かながら服の上からでもしっかり分かる（どっちだ？と冷静な俺が突っ込むが無視）

スカートから生えている太ももが、ヒップの形の良さを分からせる（女性経験ないのに？黙れ）

そんなメイがフリーズしている俺の手を取り、自分の胸元に寄せて手を・・・手を・・・

「・・・マサミチ、私はアナタを助けたいの！勿論お兄ちゃんだつてそう！・・・んん、又嘘をついちゃった。お兄ちゃんは関係ない。私が、私がアナタを・・・助けたい、失いたくない、って思うの・・・は、変なのかなあ・・・変だよ！まだ会って間もないし、出会いは、最悪だったもんね・・・マサミチは私の事嫌いだと思うし・・・ごめんね！これは忘れて！でも、助けたいって思っているのは良いよね？・・・だから、私達も協力するから、がんばろ！」

「あ・・・ああ」

「お皿、洗ってくるね。また夜に会いに来て・・・良い？」

「あ・・・ああ」

「・・・じゃあ・・・また・・・フフ」

そう言ってメイは出て行った。俺の手に乳の感触を残して・・・

第三話 自分で選んだ逃げる道

夜になった。

と言っても暗くなったから夜になった。と思っただけだが・・・

俺、この世界に来て流されてばっかだなあ

昼間のメイとのやり取りがあつた後、この世界に来てからの経緯を順を追って思い出していた。

まあ、この世界に来てから今日で一日半位しか立ってないから、思い返すのにそんなに時間はかかんないんだけどね。

しかも、その内60%位は牢屋^{コウ}で過ごしてるし・・・

「兎も角アレだ。俺には明確な目的が無いんだよな」

口に出して言っただけだ。

まあ、漠然とした目的は一応ある。

元の世界に戻る事だ。

ただ、何を？どうやって？が、全く分からない。

そりゃ当然だわな、俺は勇者でも無ければ魔王でもないし、ファンタジー異世界物の召喚なんて冗談めいた事をされた訳でもない。

せめて召喚という手段を用いて異世界に来たんであつたら、召喚者に帰り方を聞くとか、出された条件をクリアすれば帰れるとか、よしんば召喚は出来るけど、返喚出来ませんとか言われても、手がかり位は掴めそうな物だ。

「はあ・・・やっぱ俺一人ってのが良くないよな」

せめて事情を分かってくれる協力者でもいれば・・・

そんな都合の良い設定なんか、と思いながらメイとテレウスの顔を思い浮かべてみる。

溜息一つ付いて、彼女らが協力者になってくれたらと考えてみた。俺が異世界に来て、一番縁の深い者がテレウスとメイだ。後は話をするどころかまともに目も合わせていない。

果たしてあの兄妹に俺の事情と状況を話して、信じて貰えるか？無理だな。

あの勘違い腹黒兄妹に話しても、明後日の方に話を捻じ曲げられかねん。

いや、120%捻じ曲がるだろうな。

やっぱり取り合えずはココ（村）から逃げるのが一番まともな選択だな。

うーんメイの事はちよつともつたない気がするが・・・

男としての本能がムクムク顔を持ち上げるが、今のなんの力も後ろ盾も無い俺がメイに手を出した場合の今後を考えて見ると・・・

良くて聖都とやらでの獄中生活。

悪けりや処刑。

と結論を出して、ブルブルと頭を横に振る。

あり得ん選択だな、やはり逃亡案を採用。と腰を上げる。

「んじゃま、早速逃げますか！」

俺はズボンのベルトを外して、石垣の隙間の開いてるある部分にバツクルの方を差し込む。

差し込んだベルトを何回か前後に動かして、バツクルが石垣に食い込む手応えを感じる。

ベルトをゆっくり引くと、石がズズズ・・・と手前にせり出して来た。

昼間これを発見できたのは幸運だった。

この牢屋に入れられて、目が覚めてからメイとのやり取りが終わった後、俺は牢屋の壁面を調べていた。

小一時間もかからずに石が動く事を発見していた。

何箇所か動く所を確認して、一番有効な動く部分の発見もしていたのである。

ココ（牢屋）は殆どが地下に埋もってるからなあ、唯一地上に面してる天井部分の石が抜けるのはラッキーだったぜ。

俺は僅かに段差のある石垣の淵に手と足の指をかけて壁に張り付いていた。

ガコ・・・と音がして石が外れる。

そこから外を見ると、想像していたよりも暗かった。

いや、暗いなんてもんじゃない、漆黒だ。

牢屋の中も相当に暗いが、廊下の松明の火で辛うじて見える程度の明るさはあった。

だが、外の異常な暗さは現代人には恐怖としか言えない。

まっ、俺には関係ないけどな。見えるから。

俺は脱いだ靴下と靴を履くと、毛布を人型に見えなくもない（まあ、暗いから一見では分かったら）形にすると、素早く壁を蹴って外に飛び出した。

しゃがんで辺りを観察する。

思った通り人が外に居る気配は無いな、俺が夜を待ったのもそれが理由だけだな・・・

僅かに明かりの漏れる家を避ける様にして、俺は音も立てずにこの村に來た時チラ見した武器置き場へと足を進める。

テレウスが剣を置いてたのを見といて良かったぜ。

さすがに丸腰で逃亡はちと不安だしな・・・

不意に家の角から明かりが見える。

「!!!??」

俺は素早く身を伏せて明かりの方向に目を凝らす。
人影が見えた。

ん？メイじゃねーか・・・メイが松明の火の明かりに照らされてる。
アイツ、牢屋に向かつてるのか？

食事は夕方メイが持ってきてくれて（薄暗くなった頃）に済まして
る。

『夜にココに来て良い？』

メイの言葉が頭に浮かぶ。

参ったな、食事時の事を言ってたんだと思っただぜ・・・

段々俺の伏せてる場所に寄って来てるが、牢屋を指すならこっち
にはこれ以上は近寄っては来ないだろう。

万一の事を考えて、メイが俺の前を通り過ぎるのを待つ。

メイは歩みはゆっくりだった。

随分遅いな？と思った時突然メイの顔がどアップになった。

・・・・・・?!

思わず声が出そうになった。何だ？目が？！

俺は瞬きをしてから一瞬目を瞑ると、大きく目を見開いた。

・・・あん時と同じ現象だ！

俺がココ（異世界）に来て、メイと最初に出会った時起こった不可
解な現象。

超視力！

何でいきなりこんな・・・？と一瞬考えたが、俺の思考が突然目の前に全て奪われた。

超視力によって、俺の目はピントを合わせている物体がすぐ目の前、手を伸ばせば触れるんじゃないかと思うぐらい近くにある感覚になっている。

その視線の集中（ピントを合わせている）する先、メイの姿を見て俺は驚いた。

メイの奴！マジか？

俺はもともと夜目が利く、その理由は追々話すとして、もともと夜目が利く俺の目は、この超視力によるせいなのか、暗視ゴーグルでも装着してるかの如く鮮明に見えていた。

メイの奴、昼間の言動でもしかしたら？って思ったけど、マジに身体張るつもりだったのか？

松明の心許無い火の明かりに照らされたメイの服装は、透け透けのネグリジエの様な物だった。

多分夜は基本余程の事が無い限り、人は出歩かないのだろう。

じゃなきゃ幾ら暗くて見えないからって、あんな格好で出歩かないよな。

透け透けのネグリジエの奥は白いパンツを履いているだけ。

メイって綺麗な身体してんなあ〜と俺の目は胸を凝視していた・・・

メイは13・4だと思う。

もしかしたら俺と同じで童顔なだけかもしれない。

メイの肢体を見るとそう思えてくる。

小柄な体形だが、出る所は出て、引つ込む所は引つ込んでるプロポーションは、17・8歳を思わせる。

メイはポニーテールを解いて髪を垂らしていた。

昼間の印象とはまた違った雰囲気をもし出していた。

淡い蒼瞳が炎に揺り照らされて、なんともしつとりとした印象に見える。

DとEの間位だろうか？

お椀型の乳房の先端には、桜色した突起が付いていた。

俺の思った通り腰はキュツと括れて尻はツンと上を向いている。

メイは、魅力的だった。

ハッ！いかんいかん！見とれてる場合じゃない！メイが牢屋に着けば、いずれ俺が居ないのが分かるだろう。

つてか、さつきからメイは動かなくなっていた。

ん？見とれて今気づいたけど、メイの奴なんで立ち止まってるんだ？

・・・・・・？！

誰だ！？あいつ等！？

俺の超視力が、メイの後ろの木々の隙間に数人の人影を捕らえた。

ピントを合わせると、全員剣を持ってるのが見えた。

抜き身だ。

メイは迷っていた。

あゝ・・・幾ら大好きなお兄ちゃんの為だからって、ここまでする必要は無いなあ・・・

でもおゝ・・・昼間の感触だと、結構嵌まっちゃってるみたいだったなあ・・・アイツ。

ここで一押ししとけば、きっと素直に私達の言う事聞くだろぅしい・・・

逆夜這いの様な行為を計画していたメイは、いざ実行に移す手前で躊躇してしまっていた。

メイの計画はこうだ。

まず昼間に正道が自分に持つてる印象を逆転させる。

出鱈目を言って正道を村につれてくる様仕向けたのは、初めて会った時一目惚れしてしまったが、恥ずかしくてどうしたら良いか分からなくてつい逃げてしまった。

でも今更戻るなんて恥ずかしくて出来ない。

その為、兄に嘘を言って村へ連れてくるよう仕向けた。

村でもう一度会えたが、やっぱり恥ずかしくて、思った事と反対の言葉がどんどん出てきてどうにもならなくなってしまう。

言葉では恥ずかしさのあまり、つい憎まれ口しか出てこないのも、行動で示すか無いと思ひ、思ひ切ってこんな格好で会いに来てしまった。

バカな娘だと思ふけど、それだけ正道の事が好きで、どうしても正道を助きたい一心でこんなはしたない事をしてしまった。

お願い、私達の言う事を聞いて？決して悪いようにはならないから！
と言ひ、キスと少々胸を自由にさせれば言う事を聞く様になるだろう。

と、というのがメイの考えたツンデレ作戦であつた。

けど、思ひ付きにしては良く出来た作戦だと自分でも思つていたが、

・

でもなあゝ・・・アイツにファーストキスあげるのやだなあ・・・
それに・・・

メイは透け透けの乳房の突起を指で触る。

暫く立ち止まって考えてたが、

「やっぱやめやめっ！例え唇とオツパイだけだとしてもアイツにあげるのは勿体無さすぎ！つかお兄ちゃんに申し訳ないし帰ろっ」

クルツと振り返った時「なに？！」と数人の気配に気が付いた。気配の方を見ると、真っ暗だった・・・あっ！っと思ひ松明の火を振り向いた方向へと向ける。

向けた瞬間、腹中に衝撃を受ける。

・・・なに？何が起こった・・・の？・・・

自分の意識が刈り取られたのに、メイは気づく事も出来ずに意識が暗い底に沈んだ。

メイ？！

正道は焦っていた。

目の前（実際には100m程離れているが）でメイが昏倒させられ連れ去られようとしている。

クソッ！どうする？！

一人の影がメイを肩に抱えて木々の影に消え様としていた。迷ってる暇なんかあるか！

正道は素早く身体を起こすと、弾かれた様に走りだした。

クソッ！幾らなんでも分が悪りい・・・どうする？

取り合えず奴等は俺の事に気が付いてねえ。

この目があればいけるか？・・・行くしかねえかあ！

村を囲ってる石垣の壁を飛び越えていく賊達を、足音立てずに追う

正道。

壁を駆け上がり、村の外に出る。

森・・・？

数十m離れた所に木々が茂ってる。

メイを担いだ人影が木々の間を走っている姿が見える。

距離にして120mって所か、丁度良い。

この距離でなら察知される事は無いだろう。

付けさせてもらうぜ・・・

正道は漆黒の森の中へと身を飛び込ませた。

第四話 道を間違えた道

森の木々の隙間を、影がザザと音を立てて過ぎ去っていく。

かあゝ、早ええな畜生！

コリヤ付ける所か付いて行くので精一杯だ！

しかし、奴ら一体何もんだ？

ってか人間なのか？

それにしても、この眼でどんなにアップにしても【人影】としてで見えないって・・・

正道は相手の正体は分からなくても、せめて人相ぐらいは拝んでやるうと思ひ、メイを担いだ男の顔にピントを合わせてみたが頭の形の影しか見えないでいた。

距離はメイを見た時と同じぐらいだったから、遠目で分からないという事ではない。

何か使用するのに制限があるのか？

と考へてみたが、分からない事は深く考へてみても仕方ないと思考を放棄した。

そつ、それにしても、何時まで走るんだ？

もうかれこれ30分は走つてゐるぞ？

こつちのスタミナがもたね・・・

もう駄目と思つた時、人影達が止まつた。

慌てて木の影に身を隠す。

着いたか？ん？アレは・・・洞窟か？

ピントを影達から外して周辺を見ると、岩が盛り上がった真ん中に空洞が見えた。

空洞が徐々に明るくなってくる。

隠れ家・・・っか。

多分テレウスと村民達が言ってた盗賊団ってとこかな？

それにしても、影達の実力が手下だとすると、他にはもっと凄いの
が居るって事かあ？

ボスや幹部が人攫いの実行部隊って事は無いから、あの影達のリーダー
各以外は三下って事だろうなあ・・・。

俺・・・メイを助けだせるのか？

ちよつとウンザリしてきた俺の目に、洞窟から男が二人出てきて一
人がメイを影から受け取り担ぎ上げた。

クソッ！！あの男！鼻の下伸ばしやがって！

俺はメイを担いだ男が、エッチな格好をしてるメイの肢体を凝視し
てニヤニヤしてるのに腹を立てている。

と、もう一人の男が何やら取り出すのを見た。

ビン？・・・いや、壺か？・・・？！

壺を取り出した男が何やら言うつと、数人の影達の身体が、壺の中へ
と吸い込まれていった。

・・・なんだあありや！・・・やっぱあの影達人間じゃなかったの
かよ・・・

それにしても・・・壺って・・・ハクション○魔王かっての・・・

等とくだらない事考えてると、二人の男達はメイを担いで洞窟の中へと戻っていった。

さて・・・ここが分岐点だなあ・・・

多分あの洞窟が、アジトないしアジトへ通じる通路……だな。

さて、そこで俺の取る行動は？

1. 村へ戻ってテレウス達村民にココ（洞窟）の事とメイが浚われた事を話す。

2 単独で乗り込んでいって力技でメイを救出して脱出。村へ帰る。

3 近づいてこれまた単独で潜入。メイの居場所を確認して、隙を見つけて救出。村へ帰る。

4 このまま見なかった事にして、バックレる。

[illegible]

1を選んで村へ帰って話しても、助けに来るのは夜明けだろう。

浚つて来た事考えると命の危険は無いだろうが、エツチな格好のメ
イの貞操の危険はある。

ってかほぼ犯られちゃうな。

2は俺が奴等に勝てると思えねえ。何人いるかも分かんねえし。

3は・・・3が最善か？つてか3しかねえか・・・？

4を選択する位ならここに来てねえしな。

どの道村へ帰る選択肢はパスだなあ。

メイを救出出来たとしても、俺にかけられた言い掛り（魔帝国の密偵）は解消されないだろうし……

うん

よし、3を採用。

ただし、メイは気が付いていても救出後ただちに気絶させてこっそり村へ置いて逃げるという事で。

方針が決まった所で行動開始つと。

洞窟の中は地下へと広がっていた。

10mも降ると何部屋が作れる程の大きな空間が広がっている。

盗賊達はその空間に簡素な部屋を数部屋作って、遠征した時に使える簡易隠れ家として使っているのであった。

15畳位の部屋の中央に大きなテーブルが置かれている。

周りの壁にはこの大陸であろう地図が張られている。

村の見取り図らしき物も張られていた。

多分作戦室の様な物だろう。

その大きなテーブルの上にメイが寝かされていた。

「この娘がテレウスとか言う剣士の妹か？」

「へい、頭」

頭と呼ばれた男は、名をガDEMという。

大陸全土で盗みを働くガDEM盗賊団の頭目だ。

その悪名は高く、各国が高い賞金をかけて冒険者ギルドに討伐依頼を出す程だ。

ガDEMはテーブルに寝かされているメイを見下ろす。

大柄で筋肉質、口の周りに無精ひげを生やした、鋭い目つきの厳つ

い顔をしている。

手下であろう対面する男に尋ねると、ニヤニヤしながらメイの肢体を凝視している男が答える。

この男はさっき影からメイを受け取った男だ。

「・・・なんでこんな格好してるんだ？」

メイを見ながら眉間にしわを寄せて独り言の様に言うと

「さあ？行為の最中だったんじゃないですかね・・・へへへ」

下卑た薄笑いを浮かべている手下が、メイの太ももを摩りながら答えた。

するとガデムは腰の剣を一瞬で抜き、手下の首元寸前で止めた。

「この娘に手は出すな・・・」

「へっへい、分かりやした」

手下は首元の剣を見ながらゴクリと唾を飲み込んだ。

「その娘、手枷口枷をつけて、毛布でも被せて物置に入れておけ。俺はローバーを連れて帰る」

「へっへい、分かりやした」

剣を引き鞘に収めながら、手下は指示を出すガデムの顔を見てフーッと胸を撫で下ろす。

ガデムは部屋の扉を開ける前に振り返り、殺気を込めた眼で手下へと、「手は出すなよ、出したら殺すからな」ともう一度釘をさして出て行った。

ガDEMが出て行くのを確認して、手下はメイに手枷口枷をはめながら「偉そうにつー！」っと口の中でもゴモゴと言ってた。

さてと、どう進入したもんかなあゝ・・・

これって、地下に降りて行ってるんだよな？

取り合えず降りてみるか？

特殊能力発動中だし、発動中なら遠くからでも先に発見できるから見張りが居ても大丈夫だろ。

早くしないと何時切れるか分からんもんな、メイも早くしないと穴あけられちゃうしな。

ん？・・・やべっ！誰か出てくる！

正道が下品な事を考えてると、洞窟の中が明るくなる。

そそくさと木の影に隠れると、ガDEMとローバーが馬で出てきた。

中は意外と広いつて事が・・・

ガDEM達が走り去るり姿が見えなくなったのを確認して、正道は素早く洞窟内へと入っていった。

物置部屋の片隅に寝かされたメイを、さっきの男がジイイッと凝視

している。

男は数ヶ月女日照りであった。

頭から今回は聖アレサレナ王国領内の三つの村を襲うと言われ、俺はミデネ村方面のアジトの担当となった。

それは良い。所謂出世したのだから。

しかし、ミデネ村のテレウスと言う剣士が思いの他強く、数度襲撃したものの全て失敗。

二月経った時、頭はミデネ村は後回しにすると行って、先に他の二つの村を襲撃すると言い出した。

その為、俺とローバーの二人を残して、残りの手下全員と他のアジトに行ってしまったのだ。

それから半月してネーデ村の襲撃が成功し、その際数人の村娘を浚って来たと聞いた。

俺は、俺も女にありつけると思った。

だが、頭は俺達、いや、ローバーはその時頭とあっちのアジトに行ってるからその時ありついたらだろう。

俺はこのアジトの責任者だから連れて行って貰えなかった。

俺はアジトに一人となった。

結局二月半も女を抱いていない。

次の村、カレイド村を襲う為、アジトを移動するとの報告を受けた俺は、俺も一緒に連れてつてくれと頭に願い出た。

帰ってきた返答は罵りだった。

村を何度も襲って全部失敗した俺に、頭は腹を立ててた。

頭達が三つ目のアジトに移動した時、俺のここでの生活は三月目に入っていた。

カレイド村を襲う準備をしている間、頭はテレウスの妹を浚って人質にすると言ってローバーと二人で帰ってきた。

頭は【ゾルドの魔影】と呼ばれる魔導具を使って、妹を浚えと命令した。

ゾルドの魔影は数体の実態のある影を呼び出す魔導具だ。すぐ近くに来るまで気配も分らない。

攻撃しても傷を負わせられないと便利な代物だ。

ただ、一つの単純な命令しかできず、その上人を殺す事が出来ない。何故だかは分らない。

殺す事が出来るのなら、テレウスを暗殺してしまえばこれほど楽な事はないのだが。

だがまあ、テレウスの妹は浚って来れた。

テレウスの妹はガキだが女には違いない。

これで俺の女日照りも解消される。

そう思った俺だったが、頭は娘に手を出すなど言いやがった。

生かして置けさえいれば、俺が妹に何をしてても支障は無いはずだ。

俺が娘を抱いたって、人質の役割に差し支えは無い。

だが、頭は手を出したら殺すとまで言った。

本気の殺気を込めた眼で言いやがった。

頭は俺に嫌がらせしてるだけなんだ。

さっきの頭の眼に籠った殺気、その内殺されるんじゃ・・・

そんな思いが頭に浮かんた俺は、この娘やつちまって逃げるか？

そんな思いが浮かぶと、肌着一枚しか付けてないに等しい娘の裸身に、頭の中がしびれるような感覚に支配されていた。

俺は眼下に居る娘のネグリジェを脱がして、乳房を鷺掴みしていた。

正道は洞窟の中に入ると、慎重に一つ一つ確認しながら歩を進めていた。

何せ今の俺は丸腰だ、一人二人接近戦をするなら相手が武器を持つ

てても何とかなるが、
三人四人と増えたらとてもじゃないが捌き切れない。殺されるだらう。

暫くすると、ただっ広い空間に出た。

なんだ？家……か？

広い空間の中に屋根がフラットになった平屋がある。

俺は慎重に家の周りをぐるりと回つてみると、平屋の中から人の気配がしないのに考え込んだ。

人の気配がしねーな？寝てんのか？・・・

いや、それはねーな、洞窟の入り口で影を出迎えた二人と、出て行った二人。

出て行った方には知らない顔があつた。

それを考えりや例え何人かは寝てても、起きてる奴が二、三人だけ
 つて事は考えられない・・・

だが多くの人の動いてる様子も無きや、気配も無い。

どうする？ 感覚を信じるか？ 状況をしんじるか？

チツ・・・男は度胸だぜ！

感覚を信じる事にして、俺はゆっくり入り口の扉を開けて中を覗き込んだ。

[illegible]

中は通路だった。

誰も居ない。

俺はゆっくり中に入ると扉を閉める。

通路は真っ直ぐ一本、左右に八つの扉があり、通路の一番奥にも扉がある。

かがみ込んで一番手前右の扉を開けて、中を覗きこむ。

誰も居ない・・・

俺は順々に空けていく事にした。

クソッ！時間がかかるなコリヤ・・・

メイはおそらく閉じ込められてるだろうな・・・

まさか全員でメイに襲い掛かってる？

なんて事はねーなっ・・・

つれて来られてすぐさまレイプなんて、節操無さ過ぎだ。

じゃあ・・・なんでこんな人がないんだ？

疑問に答えが出ず、五つ目の扉を開けて中を覗き込んだ。

二段ベットなんてあるんだな・・・

誰もいねえ・・・

寝所に誰も寝てねえのに、誰にも会わないなんて事あるわきゃねえ！

間違いいねえ！ここにはメイと、盗賊一人だけだ！

疑問に答えを出して、俺の感覚が正しかったと確信した時、

「ふぐうううー！！！！ふうぐうううううー！！！！」

と、微かに聞こえる声が一番奥の部屋から聞こえてきた！

なんだ？！・・・メイか？！

俺は反射的に身体を走らせると、一番奥の部屋の扉を蹴り開ける。

「なっなんだテメーは!!」

部屋の中を見ると、裸のメイに覆いかぶさってる男が居た。
見ると・・・!!

男はメイの股を割り、腰を捻り込んでいた。

反射的にメイと男の結合部分にピントを合わせてしまう。

・・・・・・血?!

「テメエエエ!!!!!!」

俺は一気に爆発した感情で大声を上げた。

それと同時に弾かれた様に接近する。

俺は男に向かって思いっきり蹴りを入れた。

男は「ぐあ!!」と悲鳴を上げて勢い良く壁に身体を叩き付けられた。
た。

間髪居れずに男の股間を蹴り上げる。

声にならない悲鳴を上げて、男はブクブクと泡を吹きながら昏倒した。

男を倒した事を確認すると、俺は恐る恐るメイの方へ顔を向ける。

「大丈夫・・・ッ!チツ・・・クソ」

メイは口枷をされていて、後ろ手に手枷もされていた。

俺を見て眼を見開き、ブルブル身体を震わせている。

眼からは滝の様に涙を流していた。

俺はそっと近寄り、落ちてる毛布をかけそっと抱きしめる。

「・・・・・・・・間に合わなかったが・・・・・・・・助けに来たぜ」

メイは身体を異常な程震わし、顔面は蒼白。
淡い蒼眼からは、とめどなく涙を零していた。
口枷で息をし難そうに嗚咽を漏らしている。

「・・・・・・・・もう大丈夫だ」

気休めにしかならねえな・・・

震えているメイを、俺は唯抱きしめる事しか出来なかった。

第五話 戦いの道

俺はメイの手枷口枷を外し、他の部屋にあった綺麗目の服を適当に見繕ってメイに着せてやった。

口から泡を吹いて昏倒する男を取り合えずふん縛ってから、未だ自失しているメイをつれて部屋を出る。

どこか落ち着ける場所を選んで、入り口付近の部屋に入ろうと扉を開けると同時に、

ドスツ・・・

背中に熱い衝撃・・・

え？つと後ろを振り返ると、何処で、何時の間に拾ったのか、鮮血のついた長めの短剣を持つメイ。

ドスツ！「がつ！」ドスツ！「がはあ！」

メイは俺の背中を何度も突き刺す。

俺はあまりの激痛と衝撃に立って居られなくなり、前のめりに倒れた。

「あはははは、死ね！死ね！盗賊なんて死んじゃえ！」

視界の端にメイの顔が映る。

光の消えた蒼瞳は、何処を見てるのか、涙を垂らしながら虚空をウロウロと視線を泳がせていた。

そのまま俺の背に跨り、何度も何度も背中に短剣を突き立てる。

「あはははは・・・ああははあはあは・・・」

メイ・・・

俺は既に痛みすら無くなった身体から、急激に体温が遠のくのを感じた。

これでこの物語も終わ・・・

そこで意識がプツッと途切れた。

・・・らせねーよっ！！??

「へっ？」

思わ素っ頓狂な声を上げた。

な・・・んだ？何が起きた？ここ何処？

「ホーホーホー・・・」

梟？あれ？外？

俺は辺りを見回した。

被い茂る木々。

そして辺りを被う闇。

暗視ゴーグルを装着したかの様な視界。

身体に手をパタパタと当てながら、ひたすら『?』マークを頭に浮かべる。

あれ?俺死んだ・・・よな?

死後の世界にしちゃ感触が・・・

目の前の木をカリカリと爪で引っかき、地面の土を取って掌でニギニギしてみる。

・・・生々しいよな?しかもここって・・・

そこはさつき洞窟進入前に隠れていた所だった。

眼の先に地面からせり出した穴が開いた岩山が見える。

ひたすら思考が『?』を出し続けている。

というか、まともな思考が出来ない。

腕組みをしながら固まってる俺の眼に、洞窟から明かりが漏れてきた。

・・・・・・??

完全に思考フリーズ状態の俺の眼には、ついさつき見た男二人が馬に乗って出て行く様子が写ってる。

暫くポカンと口を開けながら二人が乗った馬を見続けた。

やがて視界から消える馬影。

それでもまだ口を開けて、馬影が消えて闇しか見えない空間を見続けた。

・・・・・・ハッ!!

なんなんだよ？さっぱりわからねえ？

わからねえが、なんにしてもこれってコンティニュー？

夢なのか現実なのかサッパリだが、今俺はここに何しに来て！何を
するつもりだった？！

そうっ！洞窟に侵入して！メイを助け出す！

そしてクソツタレなあゝの男を！殺す！

半ば強引に思考を回復させる。

余計な事を考えずに、自分のする事数点だけを考え、その他の思考
は一切排除した。

分からない事は考えない！今はな！！

俺は先程進入した時とは違い、洞窟内部に向けて全力疾走していた。

「へへへ・・・見ればこの娘、ガキの癖になかなかのもんじゃねー
か」

ネグリジエを脱がし、乳房を揉みしだきながら残る一枚の下着に手
を伸ばす。

「ドツカアアアアアー！！！」

これでもかつ！という位に物凄い勢いで開け放たれる扉の音に、男は飛び上るほど驚いた。

実際飛び上っていた。

その衝撃でメイも眼を覚ます。

裸に引ん剥かれたメイを視界に納めると、俺の沸点が急激に下降。急激な頭のシビレに身を任して男に飛び蹴りを食らわせると、衝撃で壁に叩き付けられ倒れる男の喉下に、硬い拳を思いっきり叩きつける。

「ガハアツツ！」

拳を離すと口から鮮血を吐き出し、九の字に折れ曲がる男。

俺はその顔面めがけて全体重を乗せた蹴りを、地面の方向へ蹴り入れた。

ぐしゃっと言う鈍い音と共に、踏み潰された男の頭から床に鮮血が流れます。

「ハア、ハア、ハア、ハア・・・」

肩で息する俺を、眼を見開いて見つめるメイを視界の端で捕らえる。俺はメイの方へ身体を向けると、ズサツとメイは身体を引いた。

落ち着け・・・俺。

先ずは息を整えろ。

「ハアハアハア・ハア・ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

「あーすつきりした。ってか俺、人殺しちゃったよ・・・参ったな」
落ち着い来た俺は、既に冷たくなり掛けてる倒れた男に視線を移し、
クルリとメイに向き直る。

「メイ、事情は後で話すが、助けに来た」

未だ眼を見開いて、身体を硬くするメイに歩み寄り、毛布を背から
かけてやった。

俺はメイの肩口を力強く握ると、

「分かるか？お・れ・は、メ・イ・を、た・す・け・に、き・た。
んだ。理解した？」

コクコクと頷くメイの口枷を外してやる。

「・・・色々疑問がありすぎて頭がパニック起こしてるけど、助け
に来てくれた事だけは分かった」

「ん・・・実は俺もパニックってる。ちょっと異常な事があつて、勢
いのまま飛び込んだ。今も思考が安定してねえ。だから、兎
に角ココから逃げる事を最優先で、それ以外考えない。いいか？」

「・・・うん、分かった。色々聞きたい事は後にする」

俺はメイの手枷を外すと、さつき見つけた服を持つてくる。

メイの着替える所を見ない様に背を向けると、さつき刺された記憶
が蘇り、グルツとメイの方を向いてしまった。

「キヤア！ちよつ、ちよつと！なんでこっち向くのよ！向こう向い

ててよ！」

「わっ、ワリイ！」

取り合えず着替え終わったメイに顔を叩かれた。

「・・・痛い」

頬を抑えて摩ってる俺に向かって、メイは指をビシッと指して、

「強姦魔！」

と一言言っ て頬をぶくつと膨らませる。

とほほほ・・・また強姦魔にもどっちまった。

「まあ、強姦魔は冗談だけど、レディの着替えを突然見たんだから、当然の報いだよ

・・・いくら命の恩人でも、ちゃんと順序って物が・・・ごによごによ」

頬を赤らめるメイを見て、俺は虚勢でもなんとか立ち直りかけているなど、少しばかり安心する。

出口の扉を開こうとして、俺はふと思いだす。

「あっ、ちよつとワリイ」

「どうしたの？」

「ちよつと良いものあったの思い出した。取ってくる、そこで待っ

ててくれ」

俺はメイを残して、ある部屋に向かって走り出した。

「ちよつと、マサミチー」

呼び止めるメイを無視して目的の部屋へと入る。

キョロキョロと辺を見回し、見つけた。

俺は目的の物を手に取る。

それは十二本の投げナイフが装着できる革の軽鎧だった。

背中には剣を差し込めるベルト金具も付いている。

「これこれ、正に俺向けの武具だぜ、ナイフは差し込んであるから良しと、後は・・・剣はこれでいいか」

俺は取り敢えず軽鎧の横にある。

鞘に納まつてる1m程の直刀を軽鎧背中に差し込むと、軽鎧を装備した。

いそいでメイの元へ戻る。

「もう！どこ行つて・・・何それ？どこから持ってきたの？」

メイは俺の格好を見て「盗賊から盗むなんて」と言つて少し呆れていた。

「これから何があるか分からないからな。前に潜入した時に見つけたんだ。備えあればナントヤラつてな」

「え？前つて？」

「あつ？あ、ああ、メイが捉えられてる部屋を見つける前、そう！
見つける前に入った部屋でこいつ（武具）を見つけたんだ」

俺はなんとか誤魔化す。

さあ、後は火を付けてここを脱出するぞ！

と言ってメイの背を押し外へ出た。

それから俺達は各部屋の中にあつたランタン数個の油を取り出し、
壁面数箇所に油をかけていった。油樽もあつたが重くて持ち出せな
かった。

火の入っていたランタンから火を松明に移し、その松明を油のつい
た壁に立てかける。

じりじりと火が油を焼いていき、暫くしたらボワツツと火が大きくな
る。

俺達は暫くその火を見つめ、それぞれ何かに思いふけていた。

俺、人を殺しちまったんだな・・・

火勢が大分広がり、俺は『行こう』とメイを促す。

二人は、洞窟の入口に向かって歩きだした。

俺達は燃える洞窟を出ると、少し離れた所で洞窟を振り返った。

洞窟からモクモクと煙が出てる。

良く見ると地面かも所々煙が出ていた。

今が夜でよかった。

月の明かりが届かぬ森の中は、完全なる闇に支配されている。
そのお蔭で煙は殆ど見えない。

「すげえすげえ、洞窟からモクモクだあ」

俺の眼は今だ○リッド○イならぬマサミチ・アイ発動中であつた。
この眼つてどんな設定なんだ？発動条件とかあるんか？

つてか、どうしてこんな眼を持ったんだ？

異世界に迷い込んだのが原因か？

色々考えた結果出た結論が、一度眼科へ行かにやなだった。

在るかどうかしらんけど。

ぼんやり洞窟を見ていた俺に、ランタンの明かりを向けてメイが俺の顔を覗き込む。

「見えるの？煙」

「ん？ああ・・・」（やべっ、思わず答えちゃった）

「私には殆ど見えないよ？マサミチは、もしかして【魔眼】施術者なの？」

「えっ？魔眼が何か知らんが、そんなおどろおどろしい物入れてないぞ」

魔眼つて言ったらアレか？怪物が闊歩する新宿のシヨタの男色家が持つてるものか？

「おどろおどろ？マサミチ時々解んない言葉使うね。まあ良いけど、私としては魔眼を知らない人がいた事にビックリだよ」

俺としては殆どの人が知ってるって事にビックリです。さすが異世界。

「まあ良いじゃん、取り合えずここを離れようぜ。メイを村へ送るにしても、結構距離あるからどこかで一休みしてからにしたいしさ」

「えっ？森で休憩するの」

「ああ、出来ればラブホで御休憩、といきたいけど、さすがに無いだろうから、どっか水場があればベストだな」

「うーん・・・ラブホって？ベストってあのベストの事？何かの暗号なの？」

「どのベストの事を言ってるのか分からんが、暗号じゃないよってか、このままじゃ話が進まないから俺が言い方直します」

「森で休憩を取ってから、村へメイを送ってくよ。流石に俺は行かないけどね」

「それぞれ、森で休憩って本気？私は魔獣の餌になりたくないよお」

魔獣の餌？

ああ、そうか・・・確かテレウスも魔獣とか言ってたっけ。

出会った事無いから全然ピンと来ないけど、ここに来る時も居なかったしなあ・・・

「ここに来る時全然居なかったけど？」

「それは多分魔獣よけの魔導具か、魔術式が施してあったんだよ。多分洞窟の中に設置してあったんじゃないかな？って・・・解ってて火をつけたんじゃないの!？」

「おわっ！・・・ビックリした。どうした突然大声出して？」

「信じらんない！早く逃げよう！こんな煙たい所に居たら目立つちゃうー!」

なんだ？ 囲まれてる？ チツ、何時の間に・・・

俺は心の中で舌打する。

脳が戦闘体勢を取れと命令を送るのより早く、俺は背中中の剣を素早く抜き身にする。

それを合図に一匹のバーンウルフが飛び掛ってきた。

俺は瞬時に頭と心を戦闘用に切り替えた。

メイを突き飛ばして地面に転げさせると、飛び上ったバーンウルフの眉間を狙って剣を振り下ろす。

グザツつと言う音がして、バーンウルフの頭を両断すると、力の無くなったバーンウルフを器用に剣に絡めてグルリと振り返り、後ろから飛び掛って来ていた一匹を思いっきり蹴り飛ばした。

サッカーのボレーキックの様に繰り出した蹴りで吹き飛んだバーンウルフは、更に後方から飛び掛って来ていたもう一匹にぶち当たる。剣に刺さっていたヤツは、振り返った遠心力で剣から離れると、飛び出そうとしていた一匹にぶち当たり、その場に倒れさせた。

頭がどんどん冴えて来る。

すると、俺の眼に映ってるバーンウルフの動きがスローになりだした。

俺は浮かんだ疑問を押さえ込む。

今は考える時じゃない。

バーンウルフは全部で15匹。

一匹倒したから残り14！

俺は剣を地面に突き刺すと、先程バーンウルフ同士でぶち当たって倒れた3匹の眉間を狙って、投げナイフを続け様に投げる。

ドスッ！ドスッ！ドスッ！

と鈍い音がすると、3匹はその場に崩れ落ちた。

残り11！

俺は剣を取ると弾ける様に駆け出して一匹に接近すると、横薙ぎ一線！

10！

そのままの勢いを殺さず木を蹴りジャンプして、メイに飛び掛った2匹を投げナイフで葬る。

8！

着地と同時に剣を投げると、木の隙間からメイに近づいていた一匹の胸に突き刺さった。7！

後ろから二匹のバーンウルフが駆けて来る。

振り返り様、一匹の牙を腕の筋肉を収縮硬化させて受ける。

と、残りの一匹を投げナイフを眉間に突き立て絶命させ、更に抜いたナイフで腕に噛み付いてる一匹を葬った。

5！

流石に息が乱れて来た。

「うおおおおお！！！」

俺は雄叫びを上げ、メイが伏せている方向へ向けて大地を蹴った。

走りながら投げナイフを4本投げる。

4・3・2！一匹外した！

メイに噛み付く寸前で、ショルダータックルを咬ましてぶっ飛ばす。組み付いたバーンウルフに残った投げナイフを突き立てる。

残り1い！

肩で息する俺を、残ったバーンウルフは後退りしながら見てる。

俺は後退してるバーンウルフを見てる。

そう、唯見てる・・・静かに・・・見てる。
ヤツは、逃げ出した。

「ふう、ふう、ふう、すうううう・・・ハアアアアアア」

俺は大きく深呼吸すると、その場にドサツつと尻餅をついた。
頭を抱えて丸くなってたメイが、恐る恐る顔を上げる。
暗くて見えないだろうに・・・

「メイい・・・終わったぞお」

「えっ？マツ、マサミチ？・・・どこ？」

よっこいせつと身体を起こしてメイの傍に寄る。

「よく動かず頑張ったな？」

へたり込んでるメイの頭に手を置きナデナデをしてやる。
と左腕に激痛が走る。

「いつつ!!」

「どうしたの？どこか怪我をしてるの？マサミチ、マサミチいい！」
「だ〜いじょうぶ、大丈夫だ！かすり傷だよ」

泣いてるメイを抱きしめて安心させてやる。

「ホントに？ホントのホントに？嘘付いてたら怒るからね？」

胸の中で瞳に涙を浮かべて、上目遣いに俺を見上げる。
やっぱ・・・可愛いんだよね〜こいつ。

「ああ、大丈夫だ」

パカラッ！パカラッ！パカラッ！

「ん？今度は何だあ？」

ちよつと待つてくれよとばかりに鬱陶しそうな声で言うと、メイを抱いてる腕に力が籠る。
すると、聞き覚えのある声が聞こえた。

「おおーい、大丈夫かあー」

テレウスだ。

「お兄ちゃん！」

メイは俺の腕の中から擦り抜けると、立ち上がって手を振った。
この暗闇じゃ見えねえんじゃないや・・・と思い、ランタンを探しに視線を泳がすと、

「メイ！大丈夫か！？・・・ん？マサミチ！？何でマサミチが居るんだ！？」

「見えるのか？」

俺は驚きの余り声が出た。

「見えるぞ。俺は【魔眼】施術者だからな。それより何でここに居るんだ!？」

テレウスが剣を抜いて、剣先を俺に向ける。

「まっってお兄ちゃん!マサミチは私を助けに来てくれたの」
「メイ？」

「詳しい事情は私もわからないけど、盗賊から命がけで私を助け出してくれて、今もバーンウルフから私を守ってくれたの」

テレウスは洞窟から立ち上がる煙を見て、辺りに倒れてるバーンウルフの死骸を見た。

少し考えてテレウスは口を開いた。

「マサミチが?・・・これを一人でやったのか・・・?解った、兎に角村へ帰ろう。ここに留まっていると、他の魔獣が寄ってくる。マサミチも怪我をしてるみたいだし、村へ帰るぞ。良いな？」

「・・・ふう、断れないわけね？」
「そうだ!」

「解った解った!そんな怖い顔しなくなつて、帰りますよ」

「うむ・・・メイ、俺の後ろにマサミチを乗せて、その後ろに乗るんだ」

「うん、ほら行くよマサミチ」

何時の間にかランタンを発見していたメイが、俺の背中を押した。

「へいへい・・・」

俺はテレウスの後ろへ乗ると、俺の後ろへメイが乗る。

メイは俺の腰に手を回して、しっかり身体を密着させる。

むっ胸が当たる・・・ノーブラだったよな？・・・超やわらけ・・・

異世界に来てから初めて幸せだ、と俺は思った。

そんな訳で、俺はせっかく脱出した村へ逆戻りの羽目になった。

今夜は考えなきゃならん疑問が山ほど出たなあ

それにこの先、もう俺一人で居るのもやだしな・・・

メイも居るし何とかなんだろ。

どの道、この世界で他に頼れる人も居なけりや金も無い。

メイは兎も角、テレウスの誤解をとかにやなあ・・・はあ・・・

その労力を考えて俺は溜息を付いた。

パッカラ、パッカラと馬の蹄の音が夜の森に響いてた。

第六話 眞実の道

俺達を乗せた馬は村の中へ入った。

馬小屋まで来て馬を下りる。

村へと強制送還させられた俺は、村の騒然とした臨戦態勢さに少々驚いていた。

「これ、俺が逃げたから？それともメイが浚われたからか？」

篝火がこれでもかと言う位設置されている。

石垣の壁に沿って歩哨している者。

篝火の近くで武器の手入れをしている者。

村の出入り口の門の前で立ち番している者。

村の広場の中央にテントが置かれ、その中でテーブルに地図らしき物を広げて話をしている者。

まるで前線の砦風の様相に、俺はさっき自分で言った言葉が的外れだったと認識する。

と、テレウスがその考えを肯定する様な返答をした。

「勿論マサミチの事や、メイの事もあるが、これは盗賊の夜襲を警戒しての物だ」

「へえ……まさか盗賊の事を警戒する為に設置していた場所が何者かに襲われた？」

テレウスは驚きの表情で、次の瞬間鋭い視線を刺すようにマサミチに向ける。

「なぜ知っている？」

勘弁してくれ・・・この世界のイベント次々来すぎ。
少しは落ち着いてくれよ異世界コラッ！

「別に知ってた訳じゃないさ。俺が逃げた事や、メイが浚われた事
実位じゃ、警戒が物々しすぎるし、憶測でするほどの警戒態勢でも
ないだろ？・・・したら後はこれ程の警戒をしなくちゃいけない何
かの事実が起こった。・・・と考えんのは普通の事じゃね？」

「フツ・・・成る程な」

ああ、誤解を深めた顔だなコリヤ・・・
余計な事したよ俺・・・解かにやなんのに絡めてどうする！

「マサミチい・・・腕？大丈夫？」

それまで俺の腕に絡まっていたメイが、心配そうに顔を上げて聞い
てきた。

ってか、テレウスは良いのか？

どうもメイの様子が変なんだよなあ・・・

俺を懐柔する策にしては・・・

うーん良く解らん・・・

「痛みもねえし、大丈夫だと思うぜ？かすり傷位の痛みはあるけど
な。バーンウルフったつけ？アイツ見た目より顎の力無いんだな」

「噛まれたのか！？」

「傷って噛まれた傷だったの！？」

アハハと笑う俺を、テレウスとメイが驚愕の面持ちで俺に詰め寄っ
て来た。

右側に居たメイは、俺の右腕を離すと、俺をしゃがむ様に促す。
テレウスは俺の左腕の袖を捲くつて、噛まれた箇所を聞くと触診し
だした。

「らんらよ？血もれてねえらろ？れも、なんら？うまくしゃれれ
れ・・・」

「まずい！！メイ！！」

「うん！！」

ん？なんだよ？身体が動かねえ・・・
テレウスが誰かに指示してるな・・・
メイ・・・は、どっらいちゃらな・・・
おれ・・・ろくなつれ・・・
意識の暗転・・・

《聖アレサレナ王国王城地下神殿》

湖を思わせる程の泉に、天井から清水が小さな滝の様に何本も降り
ている。

泉の真ん中に少女が一人全裸で立っていた。

少女は、聖アレサレナ王国第五王女、ルルシエル「アレサレナ」フオンランドである。

輝く金色の髪を腰まで伸ばし、まだ女性を思わせる程では無いが、ふっくらとした双丘は彼女が女である事を主張している。

絹のような真つ白な肌は、それだけで彼女を高位の身分の者であることを示していた。

瞑った瞳から、長い睫毛が生えている。

端正な顔立ち、スツと通った鼻筋、薄く何時でも微笑んでいる様な唇は、何やら祈りの言葉を奏でていた。

「ルルシエル……」

「はい……」

「勇者はまだ召喚できぬのか？」

「はい……」

「……ふむ、続けよ……必ず召喚を成功させろ」

「はい……」

《ミデネ村メイの家》

気が付くと、俺はベットに寝ていた。
窓から見える空は暗かった。

ううゝ・・・気持ちワリイ・・・

ここは・・・牢屋じゃあ・・・ねえな・・・

クソォー一体なんだったんだ？

まさか又死んでコンティニューしたんじゃねえよな？

の割には見た事ねえ部屋だ。

もっともこつち（異世界）に来て四、五日経つけど、まともに見た部屋は盗賊のアジトだけだが・・・

身体は・・・駄目だ、しびれて力が入らねえ・・・

「はあゝゝ」

俺は大きく溜息を吐いた。

又寝るのもなんだと思い、さっき思ったコンティニューの事を考えてみた。

俺がこの世界に来てから、変化があつた事と言えば・・・まずは目だな。

今は・・・発動してないか・・・

目は何がスイッチになつてるか解らないが、人間では有り得ない視力が得られる。

メイ達は【魔眼】とか言っていたが・・・

【魔眼】はこの世界では割とポピュラーな物らしい。

手段は手術なのか、薬なのかは解らないが、施術すれば誰でも持てる。

誰でも持てるが、誰でも持っていない所を見ると、金か資格か何ら

かの物を持つてないと無理って事だよな。

俺が気が付かない内に改造手術でもされたのか？

んま、目の事は誰かに詳しく聞いたら聞いてみよう。

自分でも色々試してみて、使いこなせれば結構便利だしな。

厄介なのが、コンティ・・・正式名称あるのか？・・・

まあいいかコンティニューで。

あの時、俺はメイに滅多刺しにされて確かに死んだ。

だが、次の瞬間俺は生き返った。

いや、死ぬ数分から数十分前に時間を逆行した。

と考える方が正しいだろうな。

アレが俺の意思で自由に発動するのなら、これ程チート中のチートな完全無欠・・・

って訳でもねえけど。

兎も角、次元を超えた為に備わった能力設定が『目』意外に無い俺の、強力な力になる。

もつとも発動条件が『死んでから』の発動なら御免こうむるが・・・アレはとんでもなくしんどい、死の瞬間なんか味わうのは一度で十分だ。

ってか、出来るならそんな瞬間なんか味わいたくも無い。

それにコンティニュー能力が、この世界の常識の範囲内って事は先ず無いだろう。

魔法が存在しているって嘘癖え設定がある位だから、もしかしたらあるのかも知れないが、秘匿技術扱いなのは間違いない。

あんな能力が一般に出回ってたら、葬儀屋廃業だ。

冗談は別としても、異世界であろうが無かるうが、世界的に有り得ない歪な能力だ。

まっ、その辺も今深く考えてもしようがないかぁ・・・

後は・・・今後。だな・・・

俺が元の世界に帰るにしても、まかり間違つてこの世界で生きてく事になるにせよ、信賴置ける仲間が必要不可欠だ。

それは良く解つた。

そうすると、メイと、テレウスか・・・

旅でもして仲間を見つける方法もあるが、この村を一人で出た瞬間、魔獣やら金が無いやらで、俺の運命は不幸な結果に終わるだろう。

村を出て直に信賴できる人物に会うなど、と都合の良い設定など期待するにもバカバカしい。

メイ一人でも駄目。テレウスだけなら・・・ああ、テレウスだけでもいいのか・・・

いや、テレウスを仲間にするなら、メイが先に仲間になってくれる方が確実性が増すな。

兎に角メイは仲間にしたい。

決してスケベ心からではない！俺には早苗と言う・・・

早苗・・・どうしてるのかなあ・・・俺が居なくなつて心配してるだろうか？

じじいは・・・じじいはどうでも言いか。

おつと話をもどさによ。

取り合えず俺はメイを救つた命の恩人だ。

出会いから牢屋までの印象は恐らく双方最悪だと思う。

だが、盗賊のアジトからの救出、バーンウルフ戦。

そして、ずっと腕に絡み付いて柔らかい感触を・・・

おつと、自分でも思うけど俺って相当スケベだなあ・・・

まあ、印象は普通ないし好感までは言つてるはずだ。

メイの虚言癖と、腹黒さに多少問題はあるが・・・

腹を割つて話をして駄目なら、メイの事はすっぱり忘れよう。

後は、こっちの方がどうするかだなあ・・・

テレウスは俺がどこぞの密偵だと思い込んでやがる。

なまじ腕が立つ自信から、自分の考えは事実を突きつける事でもない限り曲がらないだろう。

戦って俺の実力を示した上で・・・ジャ○プじゃ有るまいし・・・どの道無理だな・・・俺の実力を示したら疑いが増すばかりだ。

実は俺の実力はたいした事な・・・

バーンウルフ倒したの『信じられん』とか行ってたしな

いつそ腹割って男同士の話でいけるか？

そんな都合良く行くなら苦労しないっつの。

・・・うん・・・

いつその事二人は諦めて、村の別の人間を・・・

いやいや、敵である俺を信用なんてするか？

殆ど所か全く話した事も無いのに？

外で探した方がまだましか。

・・・うん・・・

そっぴや、盗賊の襲撃がどうか言ってたな・・・どうなったんだろ？

盗賊の襲撃・・・つか、それならいけるか・・・な？

いや、無理だな。

俺の嫌疑は別の所にある。

よしんば盗賊撃退に手を貸して成功したとしても、テレウスは元々

俺は良い奴って思ってる。

メイを救い出してそれは確定しただろう。

だが、それを差し引いても、密偵の嫌疑は別な視野で見るだろう・・・

・
クソッ！何で密偵なんだよ！？おかしいだろあの男は！頭ウジ沸いてんじゃ……

いかんいかん……振り出しに戻る所だった。

兎に角誤解をどう解くか？

信頼を得なくちゃならないから嘘は駄目、かといって本当の事を言っても、まず信じて貰えないだろう。

あゝ理不尽だ。

コンコン……コンコン……

ん？誰だ？

キイイと音がして扉が開かれると、そおっとトレイに桶とランタンを乗つけたメイが入ってきた。

俺は反射的に目を瞑って寝た振りをしてしまった。

メイはベット横の棚にトレイを置くと、俺の布団をはだき（あれ？俺素っ裸？）身体を濡れタオルで丁寧に拭いていく。

大事な所は辛うじて布団がかかっているが、これは……かなり恥しい！

「……凄い身体……マサミチ、キミはやっぱり魔帝国の密偵なの？……」

勇者？・・・

ちよつとそのキーワード！重要なんじゃないですか？

「・・・さてと・・・上は終わったね・・・スー、ハアー・・・よし」

え？上は？ちよつちよと、その流れって・・・だあー！今はまずい！

い・ま・は・まずいぞ！

どうする？起きるか？下は起きてる。

いやそうじゃなくて、俺のドアホ！

いきなり起きるのはまずい、ってか身体がしびれて起きれません。それに寝た振りがばれるのは、ひじょーにまずい！

うつつ・・・とか言って起きるか？・・・って既に布団がー！ー！

(泣)

「・・・つと、何時もすごいね・・・よいしょ・・・」

何時も？俺何時もこんななの？俺ってどの位こうして・・・

あ・・・メイさん・・・？・・・つく・・・これは・・・

くは・・・

薄目を開けると、メイが頬を高揚させながらも、丁寧なタオルで拭いていた。

目線は手にしたナニを凝視している・・・

今更起きれん！これで起きたら次に来るのは悲鳴とビンタ確定だ。

「よいしょ・・・はい、終わったよ。マサミチ」

行為(？)が終わると、メイはパタパタとスリッパの音をさせて部屋を出て行った。

・・・・・・・・くはあ・・・・・・・・身体が動かないのが・・・・・・・・口惜しや。

翌朝俺が目覚めた時、身体のシビレは取れていた。
昨日の事を思い出す。鼻がプクツと膨れたが無視！

勇者・・・・・・・・そして召喚・・・・・・・・か・・・

その話しが空想ではなくて、何かの事実に基づいて書かれた物だっ
たら、かなりの希望が持てるな。

黒髪に黒水晶の眼・・・・・・・・つか・・・

コンコン・・・・・・・・コンコン、ガチャ

ノックの意味あるのか？即入って来るんだが・・・
俺は眼を開けて身体を起こす。

「マサミチ！起きたんだね！」

メイが俺が起きたのを見ると、喜びと驚きの声を出しながら俺が座
ってるベットへと駆け寄った。

「・・・よかった・・・よかったよ」

涙で蒼い瞳を濡らしながら、俺に抱き付いて来たメイを

「・・・心配かけたな。すまね」

と言って頭を撫でる。

・・・ってか俺達既に結構な関係だぞ？この絵ずらを見ると。

「一週間も起きなかったから、もう駄目かと思ったんだよ？」

「へ？一週間！？俺、一週間も意識不明だったのか？」

「傷口から入った寄生型魔獣が、体内で既に卵を産んでて、孵化した魔獣が数匹頭に回ってたんだよぉ・・・お兄ちゃんも多分助からないって言うてるしい・・・でも、でも、私は絶対マサミチは助かるって思ってた・・・ひつく・・・ひつく・・・うえええええん」

一気に捲くし立てられたけど、俺って相当やばかったんだ・・・怖ええ・・・バーンウルフ怖すぎ。

メイが泣き止むまで頭を撫でていると、扉の開く音が聞こえた。

「メイ？何処だ？・・・メイ」

「あつ、お兄ちゃんだ。・・・ぐすぐす・・・ちょっと待っててね？マサミチ、今ご飯作るからね」

「あつ、ああ・・・そうか、俺一週間も何も食ってねえんだよなあ・・・」

そのままベットに突っ伏す俺の腹の虫が大合唱していた。

「ウフフフ・・・消化の善い美味しいの、沢山作るからね」

「・・・お願い致します」

俺は拝むようにメイに向かって手を合わせた。

「ああゝゝ食った、食ったああゝゝ生き返ったぜええ」

メイが作ってくれたのは、よく煮込んだスープだった。

とろとろになった何の肉だか解らない肉と、数種の野菜が煮込まれてる。

味はビーフシチューの様な感じた。正直美味かった。

うゝん、やっぱりメイって俺の事、好き？なのか？

命の恩人だからってこの扱いは手厚すぎる様な気が・・・

昨日の事といい、今日の手の込んだ料理といい・・・

それともこの世界の人間皆が恩人に対してはこんな手厚過ぎる位の感謝の情を見せるのかなあ？

「全部食べてくれるなんて思わなかった・・・凄い食欲だあ」

嬉しそうに食器を片付けるメイは、後ろにいるテレウスに『手伝ってお兄ちゃん』と言い部屋を出て行く。

「フー・・・後で良いから、話を聞きに来るぞ？」

メイの後を追い、頭を掻きながらテレウスも部屋を出て行った。

暫くして、テレウスが部屋に戻ってきた。

身体を起こそうとする俺を、手で制してベットの脇に椅子を持ってきて座る。

「メイは今、俺の家で嫁さんと一緒にお前に食わす菓子を作っている」

「ええ！？テレウスって奥さん持ち！？」

開口一番俺は今までで最高の驚きを貰った。

「俺が嫁さん貰ってるのが、そんなに变か？」

「いついや、そんな事無いけどな。アンタ二枚目だし。そうだよな、別に变じゃない。ただ驚いただけだ・・・じゃあ、この家は誰の？」

「ここはメイの家だ、一人で住んでる。まあ今はその話はいい。話はお前の事だ。単刀直入に言うぞ？正直に答えてくれ、マサミチ、お前は一体何者だ？」

おっと、そう来たか。

俺はてつきり魔帝国とやらの事を聞かれるかと思ってたが、どうやらテレウスの勘違い疑惑は振り出しに戻ったようだな・・・
今なら話せそうだ。アレの話もあるしな・・・

「ああ、正直に言っぜ。俺はメイに会ったあの日、アンタに捕まったあの日、初めてこの世界に来た。この地域って意味じゃないぜ。この世界へだ。俺は異なる世界から来た」

「そうか」

「あれ？あんま驚かないな」

「俺だってバカじゃない。あれからお前が倒したバーンウルフを調べに行った。他の魔獣の餌になっていて、損傷が酷い物や、骨だけの物もあったが、死骸は全部で14体あった」

調べに行っただのか・・・

「バーンウルフは弱い部類の魔獣だが、群れで行動する為結構厄介な魔獣だ。並の者が一人で倒せるほど甘い魔獣ではない。マサミチはそれを倒した。それもメイという御荷物を抱えてだ」

まあ、確かに良く倒せたと自分でも思うよ。

あの時は何故か良く身体が動いた、正直今までの俺では倒せなかつ

ただろう。

いや、今の俺でも無理だ。

良く考えたら、メイを守りつつ、なんで倒せたんだろ？俺

「まあ、それが出来る者も居るには居るが、それ程の者なら俺の耳に入っていない訳は無い。それに、メイが言ってたからな、マサミチは【異界の勇者】だってな」

あ・・・それ誤解

「俺は【異界の勇者】なんて恥ずいネーミングの存在じゃないぞ」
「じゃあ何者だ？」

結局それが言いたいよね。

俺が只者じゃない事はわかった。

だが、勇者などと言う物語の主人公の様な存在も信じられない。

じゃあ、何者か？

俺が自分から勇者を否定すれば、この話の流れから本当の事を言わざるおえない。

つまり・・・異世界から来た事も信じてないって訳か・・・

「俺は俺、それ以上でもないし、それ以下でもねーよ。ただ、別の世界から来たつてのは紛れも無い事実だ。勇者じゃねーけどな」

「それを信じるには、証拠が無い」

「確かに物的証拠が無ければ信じろつてのは無理だな。それに、状況証拠だけで信じるなんて甘い事も思っていない」

「有るのか？物的な証拠が？マサミチを身体検査した時もそんな物は無かったぞ？」

よし、これで良い。

「有るぜ」

「……………見せてみる、この服は証拠にならんぞ？」

テレウスが少し考えて、俺の服を持ってきた。

俺は服を受け取って起き上がった。

「これさ」

「ん？何だそれ」

「一円玉。俺の世界での最低通貨だ。素材はアルミニウム。今ここにはこれしか無いが、俺が最初にアンタに会った場所に、拾われて無ければ他の通貨もある」

そう、俺は思い出していた。

俺がこの世界に来た場所。

あの草丘で小銭をぶちまけたのを……

全部落としたと思っていたが、内ポケットの隠しポケットに一円玉が一枚だけ残っていたのだ。

「……………これは……………わかった。確かにこの世界には存在しない物だ。素材は探せばあるかも知れんが、こんな加工を施してある物は、初めて見た」

テレウスはまじまじと一円玉を見て、嚙んだり落したりしてみても

らそう言った。

「良いのか？アンタが初めて見る物なだけで、もしかしたらどこかの国にあるかしんねーぞ？」

俺は念の為、追い討ちをかける。

「いや、これでも俺は昔各国を修行の旅に出ていた事があってな。こんな物は何処の国にも存在していなかった。辺境の村程度でこれ程の物を加工するのは無理だ。信じるよマサミチ」

グッド・・・ふうー・・・これで第一段階は終了だな

「ありがとう」

「ああ・・・今後の事はマサミチが完全に回復してから、落ち着いて話すでしょう」

「あつ！そう言えば盗賊の件はどうなった？」

誤解が解けたんだったら、今後の為にも恩を売っておいて損は無い。

「ん？討伐されたよ。頭目のガテムも死んだ」

「へ？テレウスが殺ったのか？」

「いや、盗賊団はカレイド村を襲って、そこで振り返ちにされたらしい。偶々そこに居たたった一人の異国の剣士にな」

「そりゃすげーな」

「確かに、しかしその剣士、その後忽然と姿を消したそうだ」

「そうか・・・」

何か引つかかる。何だろ？

「まあ、マサミチは身体を直す事を第一に考える。他はその後だ」

「ああ、サンキュ」

「そのサンキュってマサミチの世界の言葉か？」

「ああ、ありがとって意味だ」

「ふむ、サンキュか、良いな。良い言葉だ」

「じゃあ、俺は行くぞ」

「ああ」

テレウスは部屋を出ようとドアノブに手を掻け、思い出した様に振り向いた。

「ああ、それとマサミチ。もう直メイが帰って来るが、アイツお前の事好きだぞ、よろしく頼む」

「ぶぶぶうう」

俺は喋って乾いた喉を潤そうと、口を付けたコップの水を思いつき

り霧状に噴出した。

「ははは・・・まあ、仲良くやってくれれば俺は文句なしだ！じゃあな」

はは、参ったね、最後に反撃されたな・・・。

第七話 分かれ道

「マサミチいー」

テレウスと和解した翌日から、やたらベツタリ俺に引っ付いて来るメイ。

テレウスの腕に絡まり頬を赤らめていた貴女は何処に？

まあ、悪い気はしないんだけどね・・・

なんか、こう、ほら、男って追いかけられると、逃げたくなる生き物じゃん？

ツンデレが流行るのも、男の性なんだろうなあ

「ねえねえ、今日何食べたい？早く良くなる為には、しっかりと栄養付けなきゃだから、今日もお肉にしようか？」

「あつあの、メイ？」

「ん？」

「そんなに密着すると、腕に当たる柔かいナニが俺のナニを刺激。なんちて」

ベットから起き上がれる様になった俺は、この世界の事を勉強する為テレウスに頼んで村にある世界の歴史やら魔法やらの文献を集めて貰ってきていた。

だが、メイが何かに付けて俺に構って来るので、一向に読めないでいた。

「ええっ？もうやだあー！マサミチの・・・エッチ」

メイは顔を真っ赤にして俺の腕をパツと離すと、顔を手で覆いながらイヤイヤと身体をクネクネさせる。

駄目だコリヤ。

最後のエツチの後にハートが見えたんですが・・・

しかも、覆ってる手の眼の辺りの指が開いてガン見してますよ？俺のナニの所を・・・

あからさまになり過ぎですメイさん（汗）

「マサミチのバーカあ」

パタパタと音を立てて部屋を出て行くメイの後姿を見ながら、今更嫌われるのは御免だがここまでラブ光線を注入されるのも少々困り物だなと思った。

メイとは近い内にキチンと話をしなきゃいけない。

俺は何時までもこの世界に居るつもりは無い。

帰り方が解れば直に実行に移すつもりだ。

だから、メイの好意は嬉しいが、その内居なくなる俺にはメイの好意を全面的に受けるつもりは無いのだ。という事を・・・

その日の夜、夕食時にメイからのラブ攻撃を食らった物の取分け事件も無く久し振りに穏やかな日を過ごした。

そしてメイが寝た頃、俺はランタンの明かりを頼りにテレウスから

借りた各文献に眼を通して途方も無く困っていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・字が読めねえ」

クソオーっ、盲点、盲点だったぜえ・・・

何で、何で気が付かなかったんだ！？

大体英語もともに話せない俺が、異世界の言葉なんざ話せるわけ無いのに、話せたのがいけねえんだ。

ってか、何で話せるんだろう？ご都合主義の発動？

そう言えばメイって【may】だよな？

ここの本にはアルファベット文字なんか無かったぞ？

駄目だ、考えても始まらない。

明日テレウスに相談しよう。

そう決めて、俺はランタンの明かりを消して眠った。

翌朝、朝食後にテレウスが来た。

何でも奥さんが錬金学者をやっていて、俺の事を話したら是非話を聞きたいと言っていたのだという。

「・・・という訳で、すまないがファーナにマサミチの話をしてやって貰えないか？」

俺も丁度文献の事で色々聞きたい事があったから、テレウスに手伝ってもらおうと思っていた。

と伝え、学者さんなら尚良いと二つ返事で了承した。

「じゃあ、ファーナの事よろしく頼む。それと・・・いや、いいか・・・ファーナの話、よく聞いてやってくれ」

「ああ？」

どこか悩んでる様な感じが見て取れたが、俺は特に気にする事も無くテレウスが出て行くのを黙って見ていた。

暫くすると、メイと一緒にファーナが入ってきた。

「マサミチ、お姉さん来たよ」

「初めまして、マサミチさん。ファーナと申します。今日はよろしくお願いしますね」

ごつつい美人さん来たよ。

ブロンドのウェーブがかった髪は腰までと長く、長い睫毛を携えた優しい瞳、ポテツとした唇。

背は結構高く170cm位か、8頭身と均整の取れたプロポーシヨンに、身体の線がおもきし出る胸元が開いたシャツと、ジーパンの様なズボンを履いている。

そして、何より胸がデカイ。

Gはあるだろ、アレは。

テレウスを少し恨んだ、恨まれる筋合いは無いのだがそれ程の美人だった。

「・・・・・・・・・・」

「マサミチ・・・さん？」

俺は口をポカンと開けてファーナの胸を凝視していて、ファーナの挨拶を完全無視していた。

スパーン

メイがスリッパを脱いで俺の頭を一発叩いた。

「いってーな、何すんだよメイ！」

「何すんだよじゃないよ！お姉さん見てデレーっとな鼻の下伸ばしてさっ！マサミチには私が居るでしょー！」

メイはスリッパでスパンスパン叩いてくる。

ん？なんだなんだ？なんかメイが何時もと違うぞ？でも取り合えずこのスリッパ攻撃を何とかしないと、結構痛い。

「いて！いてて！止める！コラ！メイ！」

「もー！ー！デレデレデレデレしちゃってさー！バカマサミチい！私の事好きなのにどうして？もー！」

ファーナがメイを止める迄50発は叩かれたと思う。

何時の間にか俺の立ち居地って、メイの恋人になつてんの？

まあ、百歩譲ったとしても、嫉妬心強すぎなんじゃないか？メイ？

「マサミチさんごめんなさいね。メイ、マサミチさんに謝りなさい」

「やだ。私と言う者が有りながら、ファーナにデレデレしたマサミチが悪いんだもん！ファーナはマサミチの事が好きなの？お姉さんにはお兄ちゃんが居るのに？・・・マサミチが悪いのに私が謝る事ないもん。お姉さんにデレデレしてさ！ブツブツ・・・」

メイ・・・？

ちよつと、おかしいぞ？

「そうね、確かにマサミチさんに非があるわ。あるでしょうけど、でもねメイ、マサミチさんはまだ身体が回復してないのよ？だからメイが優しくしてあげないと、治る物も直らないわよ。メイも愛しい人が何時までも治らなかつたら、困るでしょ？」

なんか・・・？なんか変じゃないか？

俺が悪者になるのも勿論アレだが、ファーナさんのメイに対する言葉には凄い違和感がある。

取り合えずこの場を収め様としてるのか？

いや、それにしてもこの言い方は不自然な気がする。

ファーナさんも表情には出していないけど、何か焦ってる感じた。

なんか、前にもこんなやり取りを・・・っ！？

早苗のお婆ちゃんだ。

早苗とアルツハイマーにかかった早苗のお婆ちゃんとの会話・・・

あの時の会話に感じた違和感だ。

俺は少し背中が寒くなる様な感覚に襲われた。

取り合えず謝ろうと、直感で思った。

「メイ、悪かった。ごめんな？俺にはメイしかないもんな、ごめん」

そう言うと、とたんにメイの膨れていた顔がパアと明るくなる。

「うっん、私も叩いたりしてごめんね。でも、マサミチには私が居るんだから、ね？」

笑顔で言うメイ。

まだちょっとおかしいが・・・

俺は少しの安堵の気持ちと、どこか暗い感情にその時どんな顔をしていたのだろう。

その少し後、メイはテレウスの手伝いをしに行くと言って部屋を出た。

メイを見送るファーストさんを見たら、悲しい顔をしていた。

「察してくれてありがとう。変だと思ったでしょう？ここの所特に酷くて、マサミチさんが関わる事に対して、異常なまでの好意の反応をしめすの。主人も私も、今はメイに話を合わせて、なるだけ刺激しない様勤めてるけど、どんどん悪くなっているわ」

「おかしくなり始めたのって、何時からなんですか？」

「特に酷くなってきたのは、マサミチさんが倒れた時からよ。マサミチさんも気が付いたと思うでしょうけど、メイにとってマサミチさんは、既に恋人になってるわ」

俺は、俺に対して好意を持ってくれたメイにラッキーぐらいにしか思っていなかった。

そんな自分に腹が立つ！

メイの言動や行動を思い返せば、初めて会った頃と今では異常な位変わっていた。

今思えば、メイの虚言や牢屋でのやり取りは普通ではない事位解るのに・・・

「本題の話の前に少し時間を貰っても良い？主人にも言われてたの、メイの事をマサミチさんにキチンと話して欲しいって、自分じゃ上手く話せないからって」

「はい、俺も聞きたいです。メイの事」

「ありがとう」

そう言つてファーナさんはメイの生い立ちから話し始めた。

「メイは、メイは主人の実の妹じゃ無いの、メイは捨て子だったのよ・・・」

ファーナさんの話によると、テレウスとメイの出会いにはテレウス11歳。メイ1歳の頃だと言つた。

テレウスが住んでいた村が戦争に巻き込まれて焼き討にあい、その時両親も殺され自分も殺されそうになった所に、偶々その村に居た一人の戦士に救われた。

その戦士は、女の赤子を連れていたと言つた。

テレウスはその戦士に弟子入りを希望して、迎えられた。

戦士は、テレウスとメイを兄妹とした。

後で解つた事だが、メイは戦士の子供では無いらしい。

戦士が修行中ある山に籠っていた時に、山頂付近に赤子が捨てられていたのを保護して、そのまま自分の娘として育てていたのだと言つた。

発見した時メイが持っていた物は、着ていた服と、【m a y】と書かれた青い宝石のついたペンダントだけだった。

不思議な事に初めて目にした【m a y】と書かれたペンダントの宝石を見ていたら、自然とメイと言う言葉が浮かんだので、赤子の名をメイとしたのだと戦士は言っていたらしい。

それから、テレウスが戦士の弟子となり8年の歳月が流れた頃、一人の魔導師が訪ねて来た。

魔導師はメイの実父であると言い、メイを引き取りたいと言ったが、戦士はその魔導師の事を知っていた。

魔導師は悪名高き魔道帝国諜報部の魔道暗殺部隊の物だった。戦士はそれを知ってはいても、一応真偽の程を確かめるべく、証拠の提示を要求した。

しかし、魔導師はそれを聞いて、突然攻撃を仕掛けてきた。

戦士はそれに応戦して、致命傷を受けながらも魔導師を倒したと言った。

だが、魔導師は息絶える前、メイに対してある魔法をかけた。

魔導術式【魔魂創造】 デモンフレイビュ

術式の詳細は解らない。

ただ、見ている事しか出来ないテレウスが、魔導師がそう言ってるのを聞いたらしかった。

師匠が死に、メイと二人きりになったテレウスは、幼いメイをつれて放浪の旅に出たのだと言っていた。

3年の月日が流れ、この村、ミデネへと流れついたテレウスは、冒険者ギルドで稼いだ金と、その間聖アレサレナ王国で出来たつてで王国籍を入手。

ミデネ村の村民となり、自警団に入った。

それまでもメイに掛けられた術式の事を常に心配していたが、特

に変わった様子の無いメイに術式は失敗したのだと思ってたらしい。

しかし、村に来て間もない頃メイに変化が見られた。

メイはそれまで兄として慕っていたが、それはあくまで兄としてで、男としての対象ではなかったテレウスを、恋人に接する様な振舞いになっていったと言う。

テレウスは困惑し、当初メイに対して何故そんな振る舞いをするのか問いた。

だがそれに対してメイは驚きの言動を口にしたと言う。

『私はお兄ちゃんを好きだから抱かれないんだよ？何かおかしい事言ってるかなあ？あつ、別にお兄ちゃんが別な人を好きになっても私は構わないからね。私はお兄ちゃんの様な強い人に抱かれて、子供を生まなきゃならないからそうするだけだから。じゃないと、私の事を助けられないんだ。あんまり拒むと私死んじゃうから。しかも、私が20歳になるまでに生まないと、死んじゃうんだって。あははは』

と、凍る様な笑顔でそう言ったらしい。

それからテレウスは、メイの振舞いに対して余り拒否をしなくなつた。

その代わり、メイの振舞う行動をのりくらりとかわしたり、時には無視をした。

幸いな事に拒否さえされなければ、させられなければ、メイは普段と変わらなかった。

テレウスはメイに掛けられた術式を調べようとして、方々調べまわった。

東西南北あらゆる国に赴き【デモンフェイヒュー魔魂創造】に付いて調べた。

魔帝国に直接赴き、諜報部を調べたりもした。

だが、術式の解明どころか意味すら解らなかった。

そんな時、東方の僻地に『世の理を理解して世界の仕組みを解き明かす学問』の存在を噂話で耳にした。

聞いた噂話の中には、魔術や魔法の基礎理論は全てその学問を元にしているらしい。

それを聞いたテレウスは、苦難の末にその地へとたどり着く。

「そこで出会ったのが私よ。彼は命を掛けて妹を救おうと、たった一人で戦っていた。そんな彼に私は惹かれ、愛する様になる迄そんな時間は掛からなかった。私と彼は夫婦となってミデネ村へと帰って来たの」

「そうだったんですか・・・」

「帰ってきた私達は当初夫婦とは言わなかったわ。私が彼から聞いた事を考えたら、それが元でメイが死ぬかも知れないと思ったからでも数日立った時、メイは私達の事を見て突然『お兄ちゃんいいお嫁さん見つけてきたんだね』と言ったの。メイがなぜそう言ったのかは、未だに解らない」

俺は今迄ファーナさんの話を聞いていて、疑問に思った事口にした。

「所で【デモンフエイヒュー魔魂創造】でしたっけ？それは結局なんだか解らないんですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そう、今現在メイはおかしくなっているという事は、その魔術式が解除されていないと言う事だ。
ファーナさんは黙っていた。

俺はファーナさんを急がせる事無く待っていると、ゆっくりと言葉を口にする。

「マサミチさん、メイと結婚してくれませんか？」

「はああ？？」

なんでそうなるの？

と思い俺は変なトーンで喋ってしまった。

デモンフエイヒュー

「【魔魂創造】に関しては、まだその術式が殆ど解明されてないわ。でも、このまま手を拱いては、メイの精神の方が持たないの。でもある文献で解った事なんだけどデモンフエイヒュー【魔魂創造】の術式には時限式の精神魔術が組み込まれていて、ある一定の期間好きな人が出来なかったり、身体に肉体的な変化がないとまずいのよ」

「はっ、はあ、なんと生々しくもやらしい設定ですね・・・でも、メイは今俺の事が好きなんですよ？なら取り合えず問題ないんじゃない？」

「そうね、確かに好きと言う感情面は問題ないわ、今の所ね。問題なのは、肉体的な方なの」

「それって、もしかして、もしかします？」

「ええ、ハッキリ言っちゃうと、初潮と破瓜の変化が無いと精神崩壊を促すような細工が組み込まれているのよ。だから、マサミチさんにメイの処女を貰ってやって欲しいの。嫌がらせみたいな魔術式よね」

「がつ・・・」

俺は絶句してしまった。

第八話 流されるも決めた道

うん．．．

俺はファーナさんのお願いに、すぐ答える事が出来ないで困っていた。

ホントーに困っていた。

メイとエッチするのは特に問題ない。
むしろしたいぐらいだ。

だが、結婚するとなったらそれは無理な話だった。

俺は別の世界から来た人間で、元の世界へ帰る方法を探している。
探してねーじゃねえかって？

そりゃ、フラグの地雷地帯にでも紛れ込んだかの様に、立て続けに
トラブルに巻き込まれてりゃ探すの無理っしょ？

だが、これからはそれらに流されずに自分の目的を達成しようと思
っていた。

その為に、先ずこの世界の事を知ろうと行動を起こした矢先にこれ
だ。

このまま流されて、メイと結婚してやる事やったとしよう。

そしたら俺は、そのままずると流される気がする。

それは非常に危険だ。

例えば子供でも出来てしまったとしよう。

アウトだ。それだけで俺は元の世界に戻る事を諦めなきゃならん。
避妊すれば？という人も居るだろう。

だが、この世界に立派な避妊具があるとは思えない。
じゃあ○出ししなければ？と言う人も居るだろう。

俺は健康な日本男児だ。

いや、日本は関係無いが。

兎に角俺はヤリタイ盛りの男なんだ！と、力説する事でもないが。

しかも、結婚したという事実があつて、相思相愛であると前提があつて、人助けと言う言い訳があれば、どこかで箍が外れるだろう。いや、自信を持って言えるが、俺は絶対にソレを我慢できない。

自慢する事じゃないけどね。

だけど、だからと言って帰れなくなるから俺シラネ。

と、俺の都合のみでメイを見捨てる事なんか出来ない。

俺はそこまで薄情者ではない。

俺に関わり無い人間の事ならいざ知らず、少なくともあの兄妹は俺の命の恩人でもある。

だから、非常に困っているのだ。

ここまで来ると、この世界の全てが俺に枷を嵌め様嵌め様としてるみたいに思えてくる。ファーナさんの言葉じゃないけど、嫌がらせかよったく。

「マサミチさん、貴方の事情は私達も十分理解しているつもりです」
考え込んでる俺を黙って見ていたファーナさんは、業を煮やして話を切り出した。

「けど、この事を頼めるのは、この世界でも唯一貴方だけなんです。メイの好意を多大に受け、なおかつ自分に小さな関わりしか持たない、しかも、自分の命を脅かしかねない存在であるメイを、命を掛けて救い出す様な素晴らしい人格をお持ちの方など他には居ません」

この人結構嫌な人だなあ。

「だから、マサミチさんには交換条件を提示したいのです」

「交換条件？」

「はい、マサミチさんがメイと結婚して・・・」

「そうそう、ちょっと待って。今迄の話しからすると、メイの精神面は取り合えずクリア・・・といけね、問題は無いんでしょう？ならその、肉体的な部分を解決するのに、どうして結婚までしなくちゃならないんですか？」

「ああ、そうですね。確かに【肉体的な部分の問題】を解決するのに、結婚と言う事実は必要ではないわね。無理やりでも良い訳だし」

「じゃあ「でもね、さっき嫌がらせて言ったけど、この魔術式ってホント頭に来ちゃうほど精工に組まれていて【結婚】と言う精神面の認識があつて、【破瓜】の事実を肉体が認識しないと駄目なの。いやんなっちゃうわよねえ」」

俺の言葉を遮って発したファーナさんの言葉に俺は本日二度目の絶句を迎えた。

「んなアホな・・・」

マサミチが有り得ない程の設定に絶句している頃、聖王国では異界からの召喚が成功していた。

《聖アレサレナ王国》

聖アレサレナ王国の歴史は古い。

この世界で最古と言って良い国だ。

建国時期は正確ではないが、約3000年前程では無いと言われる。
ている。

実際確認されている最古の文献（約2900年前）にも『昔から聖アレサレナ王国では』との記述があるのだ。

何故そんなに長い間繁栄をしているのか？

3000年の間には勿論戦争もあったし、国を揺るがす様な天変地異、疫病などの災害もあった。

内乱、政権（王位）交代等と言った、おおそ考えられる事柄は全部経験してると言ってもいいだろう。

そんな、滅んでいても不思議では無い程の国難があったのにも関わらず、今だ繁栄を続けているのには、アレサレナ聖教の教えのおかげだとされている。

実際2000年程前に、聖王国は相次ぐ自然災害のせいで、深刻な食糧自給困難な状態にあった。

しかも、そんな状態を狙って聖王国の西に位置する大国、バルディア王国が戦争を仕掛けてきたのである。

深刻な食糧不足により、軍事、経済、治安が最悪の状態にあった為、聖王国は滅ぶだろうとの見解が強かった。

しかも、利が無い国の援助は出来かねると、当時同盟を連ねていた国々も援軍を送る事はせず、完全に傍観を決めていた。

更には王族を嫁がせている結び付きの深い国でさえ、聖王国の滅亡はもはや仕方なしと、傍観されていたのである。

だが、そんな最悪の状態を聖王国は見事に切り抜ける所か、逆にバルディア皇国に攻め入り、戦争を策謀した当時の宰相を倒して勝利してしまっただのである。

その詳細は不明なのではあるが、噂によると聖王国のお伽話に出てくる【異界の勇者】が召喚され、それによって戦争を勝利に導けたと言われたらしい。

あくまでも噂だが、昔から聖王国には異世界から勇者を召喚する魔術式が存在している。と言われていた。

だが、聖王国はその存在を否定している。

あくまで噂、お伽話であると。

《聖王国地下神殿・聖なる泉》

「・・・召喚は成功したか」

「はい・・・」

聖王国第五王女、ルルシエル「アレサレナ」フォンランドは憔悴しきった瞳で、黒いローブにスッポリ包まれ、頭からフードを深々と被っている男に淡々と返事をした。

「では、後の処置は解るな？ルルシエル」

「はい・・・」

黒衣の男の瞳は赤く不気味に光っている。

その不気味な光を放つ視線を、泉の中央の祭壇、ルルシエルの前に倒れている娘へと向ける。

娘は全裸で仰向けに倒れている。

肩ほどまである黒髪を泉に濡らし、瞳は閉じられていた。

端正な顔付きに、未成熟ではあるが均整の取れたプロポーション。

泉に濡れた身体は美しかった。

100人男が居たら、99人がその姿に魅了されるであろう。

「では聖王国第五王女ルルシエル」アレサレナ」フォンランド姫よ、今を持ってそちを勇者付きの従姫とする。今後はザザーランド」ハル」ハルシオン卿と共に勇者の教育（調教）に当たれ」

黒衣の男が力の籠った言葉を吐くと、ルルシエルは一瞬身体をビクンと震わせて返事をする。

と、黒衣の男に近寄りその手の甲に跪いてキスをする。

「はい・・・我が愛する主、ファルシオン」シュテン」バウワー教皇様の仰せのままに・・・」

その瞳は主と呼んだファルシオンを見詰えている様な、何処か別な所を見ている様な、虚ろな眼をしていた。

ファルシオンと呼ばれた黒衣の男は、禍々しい赤いオーラを立ち上らせながら『クッククツ』と笑い、眼下に居る妖精の様な幼い姫を赤い眼で見据えていた。

「・・・とまあ、私達の条件はこんなところよ。どう？マサミチさん」

俺がメイと結婚して、夫婦の契りを交わす代わりに出した条件は

1・聖アレサレナ王国国籍を貰え、この世界で何不自由無く生活できる様保障し、マサミチとメイは聖王都で屋敷を構え、そこでテレウスとファーナと一緒に生活する。マサミチの王都での身分は高く、王族の親戚筋に当たるある伯爵を後見人として、王宮内事、政治、軍事には関れないが、聖アレサレナ王国領内限定で、男爵級の身分を持てる事とする。

2・マサミチが元の世界に戻る為の助力は惜しまない。だが帰る方法が解つても、メイの魔術式が解除される迄は夫婦を続ける事とする。

3・先にメイの魔術式が解かれた場合は、マサミチに結婚を継続するか、離婚をするかの選択は任す事とする。その際はメイに選択権は無い物とする。

4・マサミチの行動の自由は保障されるが、その行動範囲は聖アレサレナ王国領内限定とする。

5・1・2・3・4の約定が当方の都合で破られた場合、結婚の効力は破棄され、マサミチの元の世界に帰る為の助力のみ有効になる物とする。

ファーナさんから提示された条件は大体こんな感じだった。

俺にとっては美味し過ぎる条件だ。

細かい部分は端折っちゃってるが・・・

ファーナさんの事だから俺に気が付かれる事無く、上手く自分達にも条件が良い様に造られているんじゃないか？

とも思ってたが、まあ、ハッキリ言って細かい事はあんま気しない性格（結構気にしてる部分もあるのは認める）の俺は、俺が元の世界に帰るのを邪魔をしないで協力してくれるならメイを助けるのに俺には何の問題も無い。

俺だってメイを助けたいからな。

とファーナさんに告げた。

「そう言ってくれると思ってたわ。何時までかは正直解らないけど、これから私達は家族よ。どうぞよろしくね。マサミチ」

ニコッと笑顔で手を差し伸べたファーナさんの手を取って握手を交わす。

既に名前が呼び捨てになってるな。

ファーナさん結構フランクだ。

そっいう所は俺には好感触だな。

堅苦しいの嫌いだし。

「あつ！そう言えばメイの苗字ってどうなるんだ？婿養子はなんとなくやだなあ」

俺は結構細かい（笑）

「え？苗字って？」

「ああ、こつちの世界じゃ苗字じゃわかんないか。俺の名前は佐野^{サノク}倉正道^{ラマサミチ}って言つて、サノクラが苗字（姓）でマサミチが名前（名）なんだ」

「なるほど、ファースト（名）とセカンド（姓）と言つ事ね。読み方は逆みたいだけど」

「ファースト、セカンドね。サードもあつたりして。ははっ」

「有るわよ？サード。良く解つたわね。フフ」

「有るのかよ。んで、そのサードってのは？」

「マサミチの世界にはないの？サードは聖名と言つて、神様から貰う名前の事よ。まっ、最近では貴族達が単なる身分差別の為に使つてる様だけどね」

「なるほど、俺の世界での洗礼名と言ふ奴か。そんで、メイのセカンドはなんて名？」

「メイのセカンドはサージエ、メイ〓サージエよ。まあ、私もテレウスもサージエだけど。それとマサミチは名前の読み方の変更が必要ね、マサミチ〓サノクラになるわね。結婚の儀式が終わると、メイは、メイ〓サノクラになるわ」

「なんか、姓名が変わると聞くと、結婚するって実感わくなあ」

「フッフ・・・何か嬉しそうね。まあ、メイは身内贔屓を差し引いても可愛いからね」

身内贔屓なんて言葉が存在するんだ。と思いながら

「まあね、ファーナも美人だし。家族としては嬉しい限りさ」

と少しおべんちゃらを言ってみた。

「あら美人だなんて・・・フフ、ありがと。お世辞でも嬉しいわ。でも、メイの前では禁句よ？マサミチはね」

なんてウインクして返される。色ッペー。

うゝん、なんか大人の対応で返された。

「それとマサミチとメイはサードが付くから覚えておいてね？」

「あつ、そうか俺男爵（仮）になるんだっけか、めんどくさそ」

「フッフ、サードが付く位どって事無いわよ。公式の場でもない限り使わないしね」

「そうなのか？まあ、それなら別に良いか。んで、俺とメイのサードってなんて名？」

「それはまだ決まっていな。伯爵が用意してくれていると思うから、聖都に行って伯爵から直接聞いてちょうだい」

「了解。それと伯爵ってどんな人？」

「それは会ってからの楽しみよ？フフ」

「ワースレハタノシミダー」

「ちよつと、棒読みじゃない。くすくす、後は？何か質問有る？」

場がだらけて来たので、そろそろ終わりにしようとファーナが質問を促す。

「ああ、最後に一つだけ」

「なに？」

「メイってまだ14歳だよな？俺の世界で14歳って言ったら、法律で結婚出来ないと決まってるんだ。未成熟、未成年って事でね。その辺どうなんだ？」

「法律では何の問題も無いわ。基本的に結婚に年齢制限なんて無いしね。未成熟って所は、問題ないでしょ？フフ」

まあ、確かにメイは顔と身長だけ見れば美少女中学生位に見える（150cmサイズと身長が小柄なのと童顔）ってのが問題な位で、女性的な部分（性的な身体）は未成熟では無いな。

俺の既成概念が問題なだけだ。

年齢的にも、俺もまだ17歳だから、メイと3歳しか変わらない。年下3歳違いなど腐るほど居る。

それに、俺の看病していた時に思ったが、精神的な性に対しても未成熟ではないだろう。

「解った解った、何の問題も無しと言う事だな。しいて言えば、メイが正気で俺の事を好いてるんじゃないって所だけだ。正直キチンとメイの確認も取りたかったが、背に腹は変えられないしな」

「あら？メイはキチンとその辺は解ってるわよ？おかしくなったと言つても、人格が変わる訳じゃないしね。むしろその逆よ？本心が誇張され、激しい表現になるだけ。拘束されている結婚や、セックスなんかも、好きな人としかないし、出来ないわよ。私達は逆にそれで困つてたしね」

「ああ、そうか。そおだったな」

「他には？」

「今は無いな。後はどうせ追々になるんだろ？」

「そうね、メイの事も、マサミチが元の世界に戻る事も、聖アレサレナ王国聖都に行つて落ち着いてからね」

「まあ、そうだろうな。俺も身体、本調子に戻さなきゃだしな」

「そうそう、あつ、字の勉強は明日からでも出来るわね」

「ああっ！そうだそうだ！それも聞きたかったんだ！俺って何で字も読めねえのに会話できるんだ？つか俺が字を読み書き出来ないの知ってたのか？」

「まあ、ある程度の予想はつけてたからね。憶測は出来るけど、それに付いて（会話）はキチンと調べてみないと解らないけど、読み書きなら普通に勉強すれば良いだけだから、明日から私とメイも交

えてビシビシ行くからそのつもりでね？」

ファーナはウインクして、ビシビシの所を嬉しそうに弾みながら言っていた。

ファーナってたぶんSだな・・・等と思ってしまった。

ファーナが会話を締めくくった頃、外は既に日が傾きかけているのを見てテレウスとメイを迎えに行くとファーナは部屋を出て行った。

出て行くファーナを見送って、俺は結局流されたか。

等と考え、まあそれはそれで良いか。

と、既にメイとの甘い一時に不謹慎ながら胸を高鳴らせていた。

第九話 新しい道

暗い、赤い、いや、赤暗いのか・・・
この夢、あの時見た夢だ。

赤く暗い霧が辺りに立ち込めている。

そうだ、早苗は？早苗はどこだ？

それにあの男。

あの男は何かヤバイ感じがした。

俺はキヨロキヨロと辺りを見回す。

深く暗い赤霧のせいで、1m先も見えやしない。

「・・・チ・・・ミチ・・・マサミチ・・・助けて、正道！」

「早苗！？早苗か！？何処だ！！何処に居る！！」

早苗の声が聞こえた。俺は声のする方へと弾かれた様に走り出す。

走る。走る。走る。走る。走る。走る。走る。走る。
走る。走る。走る。走る。走る。走る。走る。走る。
走る。走る。走る。走る。走る。走る。走る。走る。

「ハア、ハア、ハア、ど、何処だ。ハア、ハア、ハア、何処に居る
！！早苗え！！」

「・・・こよ・・・ここよ、マサミチ」

俺の走る先に人影が見えた。

きっと早苗だ！と確信すると、その俺の確信を肯定するようにその
人影が返事をした。

段々と近づくにつれ人影の輪郭がハッキリしてきた。

早苗だ！間違いない。

忘れる物か、俺の17年間の人生で、常に俺の隣に居てくれた早苗。生まれた時から隣に居た早苗。

物心付いてからずっと好きだった。

告白は、出来ないけど、高校を卒業する前には告白するつもりだった。

それが、俺が異世界なんぞに来ちまったせいで、もう二度と会えないんじゃないかと思った。

その早苗が目の前にいて、変わらぬ笑顔で俺を見てくれている。俺はこれが夢だと言う事を完全に忘れていた。

「ハアハアハアハア、ハア、ハア・ハア・ハア・ハア・ハ
ア、んく、早苗」

息を整え、俺は早苗の事を抱きしめた。

早苗も俺を抱きしめてくれた。

「正道、私を助けて？」

「何だ？どうした？何があった？」

早苗は俺に助けを求めた。

俺は抱き締めていた腕を放し、早苗の肩に手をやると、覗き込む様に早苗を見た。

すると、早苗の後ろからにじみ出る様に人影が出てくる。

「誰だ!？」

早苗を後ろに隠すように庇うと、人影に向かって戦闘態勢をとる。

すぐそこに居るのに姿が影にしか見えない。

「何の様だ！？ 答えろ！！」

早苗は震えていた。

背中越しに感じる早苗の震えは酷く、明らかに目の前の人影に怯えていた。

それを感じた俺は、人影を有無を言わずぶっ飛ばそうと拳に力を入れた。

その時、

「おいで、早苗」

人影が口を開く。

「何をふざけた事言ってやがる」

「・・・・はい・・・・仰せのままに・・・・」

「なっ？？？」

俺は人影を殴ろうと腕を振り上げたまま、後ろの早苗を見た。すると眼の光の無い早苗は、ゆっくりと人影の方へと歩く。

「なっ？ どうした？ 早苗？」

ゆっくり人影の方へ歩いていく早苗を、俺は捕まえ様として、捕まえられなかった。

「な・・・んだ？・・・身体が？・・・動かね・・・え・・・クソッ！ 早苗！ 行くな！ 行くなああああ！！！！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・アアアアアッ！！！！」

「きゃあああああ！！！！」

ハッ！つとして俺は目覚める。

窓から小鳥の囀る声が聞こえる。

朝か、なんだ？夢でも見てたのか？なんの夢だった？

・・・・全然覚えてねえ・・

「あ・・あの・・マサミチ？大丈夫？・・マサミチ、魔されてたから・・」

メイだった、どうやら俺が魔されていて心配で来てくれたのか。
脅かしちまった様だな。

「えっ？・・ああ、変な夢でも見たみたいだ。大丈夫・・ぶっ！？」

メイの顔が目の前にある。

唇が触れそうな距離だ。

驚いた俺は慌ててメイを引き剥がす様に顔の距離を取った。

俺のうねり声は隣の部屋まで聞こえていたらしく、朝食の準備をしていたメイが心配になって様子を見に来たんだと言う。

壓されてる俺を起こそうと、ベットに近寄り顔を覗き込んだとたん、大声と共に抱きつかれたらしかった。

「ごめん！ビックリしたろう？変な夢見てさ、ホントにごめんな？」

「ううん、平気だよ。抱きつかれた時は、ちょっとビックリしたけど。」

頬をほんのり朱に染めたメイは、恥かしそうに俺を見ていた。

朝の日の光に、メイの赤茶けた髪が少し金色帯びている。

ポニーテールに纏めたにも関わらず、ハッキリと髪の毛の線も細く艶やかに見え、綺麗だった。

俺を見ている瞳も光を携え、淡い蒼色がキラキラと輝いていた。

「なっなに？そんなにじつと見て。はっ、恥かしいじゃない」

テレテレするメイ、やっぱり可愛いな・・・俺のドストライクだよな・

・

早苗系の容姿って・・・

照れてモジモジちゃんになってるメイを見て、つくづく思った。

「いや、綺麗だなんて思ってたさ」

正直な感想が素のまま出た。

「ばっ、ばっかじゃないの朝っぱらからあ！・・・んもう！エッチ
！！変態！！色情狂！！」

耳所か首まで真っ赤に染まったメイが、それを隠す様に俺に罵声を浴びせて部屋を出て行った。

「……ん？このやり取りって……どこかで？……」

ああっ！そうだ、俺が村に初めて来た頃したやり取りと感じが似てらあゝ

なんだ、メイの奴、少しは元に戻ったんだな。

後でファーナに言ってみよう。

俺は少し嬉しくなってベットを降りる。

「おっ！いいぞ！大分楽になった。これなら外に出て動けそうな感じだ」

起き上がって身体が軽くなってるのを感じると、俺はその場で屈伸やら伸びやらをして、身体の調子確かめていく。

昨日の昼位までは、立ち上がるとふら付いていた感覚は今も無かった。

朝食を食べ終えた俺は、庭に出て身体の回復具合を試していた。

準備体操から始まって、柔軟、腕立て、腹筋、スクワットとこなして行く俺は、ビックリしていた。

軽くするつもりだった。

元の世界で毎朝やっていたトレーニングを、半分ほどこなすつもりだったのに……

気が付くと汗も掻かずに2倍の量をこなしていた。

「全然疲れてない……」

スクワットを1000回終えた俺は、自分の手を見ながらボソっとつぶやく。

何なんだこれ？全然つかねえぞ？

こつちの世界に来て、今まで多少の変化はあったけど、ここまであからさまな変化は無かったのに・・・

徐々に変わる仕様なのか？

このままトレしても、多分夕方まで出来そうな感じだし・・・
どちらにしてもこれじゃあ回復の具合が今一解らねえなあ。
模擬戦でも出来れば・・・

その時、ずっと見ていたメイの声が聞こえた。

「お兄ちゃん」

テレウスが庭に木剣を持って入ってくる。

「随分回復したみたいだな、どうだ？」

木剣・・・

「ああ、殆ど問題ないな・・・そうだ、テレウスの居る自警団って訓練所とか無いのか？」

「ん？あるぞ」

「そこで、練習試合かなんかしたいんだけど、いいかな？」

トレーニングと、練習でも実戦をするのでは、全くと言って良いほど身体の使い方が違う。

トレーニングは、筋肉に単調な負荷作業を繰り返し、ダメージを与えて超回復によって、基礎筋力やスタミナをアップさせる方法だ。
それに比べて、組打ちや組み手などは、身体全体の性能チェックと言える。

しかも試合形式や模擬戦などは、精神や頭脳などをフルに使うので、身体への負荷は更に増す。

その為、身体性能の上限を知るにはもってこいなのである。

「ええ？駄目だよマサミチい。良くなっただって言ったって、昨日までフラフラしてたんだよ？いきなり激しい運動なんて駄目駄目え！」

メイがテレウスの代わりに答える。

「メイもさつきから見ていて解ったと思うけど、アレだけ動いても全然疲れてねえんだ。回復具合を見るにはもう模擬戦闘するしかないんだよ。まあ、無茶はしないつもりさ」

メイに向かって手をヒラヒラさせると、メイに向かってテレウスの口が開く。

「メイ、マサミチはどの位のトレーニングをしていたんだ？」

「え？えっと、腹筋600回、腕立て1000回、何かしゃがんだり立ったりが1000回・・・かな？」

「・・・それで、マサミチ。全然疲れていないのか？」

メイの方から今度は俺の方へ向きを変えるテレウス。

「ああ、逆に疲れるより、身体のキレが良くなった感じだ」

「ふむ・・・じゃあ、少しやってみるか？」

「お兄ちゃん！？無理だよ！？」

「なに、俺がしっかり見ていてダメならすぐに止めさせるよ。それでいいな？マサミチ」

「ああ」

メイはツカツカと俺の前まで来て、俺を指差して頬を膨らませた。

「もうー、また倒れても知らないからね！？」

「そんなときやまたメイに看病してもらえば、すぐに治るだろ？」

と俺は笑顔で言い。

少しの間を置いて、メイの耳元により囁くように

「メイの看病は愛が籠ってるから、凄く効くんだし大丈夫さ」

と言って頭を撫でる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・マサミチずるいい・・・・・・」

頬を赤らめて俯いてしまった。

「はあ！..!」

「セイツー!!」

「ほら、どうしたどうした!」

「くそっ! まだまだあー!」

木剣を持った男達の喧騒が響いてる。

ミデネ村自警団修練場。

普通ミデネ村の様な、町に近い程度の規模を持つ村や、近隣諸国の国境付近の村には自警団が存在する。

そして、その自警団には近隣の騎士団詰め所から、数人の騎士が派遣されるシステムとなっていた。

そして派遣された騎士は、村民から若者を募って訓練をつける。

そうして出来た自警団は、更に村民兵を増やして規模を大きくさせていくのである。

その際、領地を支配している貴族は、装備やその他の必要な道具や機材、食料、更には給金まで支給していた。

その代わり、有事の際には自警団がそのまま軍に編成される。戦争に借り出されるのは抵抗ある。

だが村にとっては、自分達を魔獣や野盗達から守る為に必要な戦力を、ただで、しかも質の良い自警団を作れる為、どこの国の村でも実施していた。

その中でも、ミデネ村の自警団の質はかなり良かった。

「おゝすげえ、すげえ。気合入ってるな」

俺は久し振りの外の空気（庭は家の中って感覚がある）に少し高揚感を持ったが、修練場の空気は身が引き締まる感じを覚えた。

「やめ~~~~~い!!」

「テレウス団長へ敬礼!!」

修練場で稽古していた全員が、その場で一斉にテレウスに向かって自分の胸の辺りに手をかざした。

テレウスって団長だったのか・・・あの勘違い性質でよく勤まるな。等と心の中で思っていると、一人革の鎧を着た男が近づいてきた。

「よっ！そいつが異世界から来たってホラ吹いてるガキか？テレウス」

かっちーん！開口一番なんだコノヤロウ。
すっげえ久々に頭にきたぞ。

「ホラじゃないぞ。ライル、そんな言い方しか出来んから、騎士団にも居られなくなるんだ。マサミチに謝罪しろ」

「へっ！俺はテメーの部下じゃねーから聞けねーな」

「テレウス。この馬鹿は自警団員の馬鹿なのか？それとも唯の馬鹿なのか？」

「ああん？いい度胸だな。人の事馬鹿馬鹿言いやがって」

「ライル！」

「はいはい、退散するよ。よかつたなガキ、テレウスに助けてもらつてよ。じゃ無きゃ死んでたぜ」

俺は我慢強い。我慢じゃないが場の空気も読める男だ。

ここで、この馬鹿に手を出したらテレウスに迷惑が掛かる。

それに喧嘩なんかしたら、メイにも心配かけてしまう。

俺は我慢強い男だ。

この馬鹿は子供だ。

子供に一々腹を立てる大人はいない。

俺は大人だ。

「マサミチ！！」

「ぐあっ！」

「へっ？」

あれ？馬鹿が吹っ飛んでる・・・

俺の腕がストレートの形に伸びてる・・・

参ったねこりや・・・

「でめー！！いきなり何しやがる！！」

ああ、怒りの余り思考と身体が完全分離したな・・・

「ぶつころ『模擬戦をす』る！」

「落ち着けライル。暴言を吐いた貴様。いきなり暴力を振るったマサミチ。団規則で喧嘩は模擬戦を持って双方遺恨の無い様決着をつけるのが決まりだ」

なるほど、模擬戦なら合法的に相手を叩きのめせる。
しかも死人も出にくい。

「・・・いいぜ、小僧、半殺しで勘弁してやる。こい！」

テレウスの言葉で冷静さは取り戻したみたいだな。唯の馬鹿ではな

いらしい。

「ああ、いいぜ。子供のおいたには躰が必要だもんな」

「!!!!!!口のへらねえ小僧だぜ、後悔するなよ」

ライルが鬼の形相で睨んで来る。

と、クルリと向きを変えて武器小屋へと歩いていった。

「マサミチ・もう少しキミは大人だと思っていたのだから」

「すまねえなテレウス。奴の言う通り、まだ俺はガキだったらしい」

本当にすまなそうに言う俺を見て、テレウスは笑顔を見せながら

「だが、すっきりしたぞ。ヤツは伯爵の甥っ子でな、俺もそんなに強くは言えないでいた。だが、あんな感じで誰彼構わず噛み付く馬鹿だが、強いぞ。気を付けていけ」

「ああ、忠告サンキュ」

俺は親指を立ててテレウスに言うと、武器小屋へと歩いた。

第十話 カエルが飛んでる俺の道

ライルは既にスタンバツていた。

俺は模擬戦場に向かって歩きながら、今の自分の状態を分析してみ
る。

俺の身体は恐らく以前の2倍程度の身体能力が、強化が成されてい
ると見ていいだろうな。

すると、木の剣でも人を切れるかもしれねえ。

あの馬鹿がある程度の実力があると見ても、無茶は出来ねえか。
なら、8割の力で試させて貰おう。

俺は開始位置に來ると、ライルと後ろを向き合う。

テレウスが模擬戦に置ける注意点を話し出した。

「まず、相手を死傷させる様な急所攻撃は禁止する。勝利条件は戦
闘不能になるか、降参するかだ。降参する時は、相手に『参った』
と言う事。戦闘時間は20分だ。それを超えた時は、どちらが優位
な立場にしようと引き分けとする。以上だ！双方一分後に模擬戦開
始！」

そう言つと、テレウスは観戦席に下がった。

ふん、あの馬鹿は来るかな？

あ、やっぱ来るのね。

ライルは開始時間30秒を残して切りかかって來た。
俺はまだ後ろを向いている。

「ライルの野郎汚ねえ！」

何処からかそんな声が聞こえてきた。

「戦場で汚ねえもクソもあるかよ！ほら寝な！」

俺はライルが袈裟切りに仕掛けてきた攻撃を、難なく背中に剣を回して受ける。

「なっ！」

「確かに戦場に汚ねえもクソもねえな」

俺は後ろを向いたまま、首だけ捻ってライルを見る。

驚いているライルを一瞥して、身体を沈み込ませると足払いをかけた。

「うおっ！」

ライルはその場で足払いによって後ろへ転倒。

おいおい、こんなので転ぶなよ。

俺はライルのあまりの不甲斐なさに逆に舌を巻くと、剣を喉元に突き立てた。

「降参？」

「ざけんな！！」

ライルは俺の剣を弾こうと、倒れたまま剣を横薙ぎに払おうとした。が、俺の剣はそれを逆に弾き飛ばす。

あゝあ、こりや駄目だ。

肩慣らしにもなりやしねえ。

あそこで普通剣を薙ぎに行くか？

そりゃ、超が付くほどの馬鹿力ならまだしも、足場もしっかりしてない体制でそんなの出来るかよ。

と、思いながら終わりにしようとライルの腹に拳を入れる。

「がつ・・・」

はい、終了。

ライルの身体が九の時に曲がり、気絶した。

「ラ、ライルの気絶により、勝者マサミチ！」

テレウスが俺に勝者と言い渡した。

驚いている。

いや、テレウスだけじゃない。

ここで、観戦している全員が言葉を発せ無いでいた。

戦闘中は集中していた為、倒す事ばかり考えてた俺も、実は余りにもあつけない勝利にビックリしていた。

こんなもんか？

これじゃライルが弱すぎるのか、俺が強すぎるのか解んねえじゃないか。

俺の想像だともう少し、いや、8割でもいい試合つてのが出来ると思ってたんだが、これほどあつけなく終わると、正直どうして良いか解らなくなってた。

「凄いなマサミチ。ライルは腐っても騎士団に入れる程度の実力は

あるのに、瞬殺とはな。どこかで剣術の教えを受けていたのか？」

いや、例え剣術を習っていても、今剣術の『け』の字も出してねえし。

まあ、剣術は習っていたけど・・・

等と突っ込みを入れていたが、一応テレウスには本当の事を話そうと口を開く。

「ああ、古流剣術と忍術ってヤツを少しな」

俺は実を言うと忍者の家系に生まれていた。

現代忍術で生き残っている、柳生心眼流柳心館の様なメジャー所等ではなく、実在していないとされている、風魔流忍術の佐野倉本道と言っ流派だ。

幼い頃から爺に徹底的に叩き込まれた忍術だったが、中学の時親父とお袋が死んでからは、爺も何故か俺に教える事も無くなった。

まあ、深い話は良いとして、俺が忍術を使えるにしてもこの決着の速さは以上だよな。

「忍術？忍びの事か？」

こりゃどびっくり！

「居んのか！？この世界に！？」

俺は思わず大きな声を出してしまった。

周りの団員が一斉に俺を見る。

「あつ・・・テレウス。少し向こうで聞きたい事があるんだけど？」

「ああ、俺も聞きたい事がある。そうだな、2時間程してお前達の

家に行く」

俺達って、メイと俺か？まあ、良いか。

俺は余計な突込みを入れずに了承すると、修練場を後にした。

「ただいま」

「あつ、おかえりマサミチ。怪我、してない？大丈夫だった？」

「んっ、この通り」

家に帰った俺は、心配そうな顔で出迎えたメイに力瘤を出す仕草で答える。

俺の仕草に溜息付いて安心するメイ。

「心配したんだから」

俺は帰りの途中である事を考えていた。

それは、この村に居てもこれ以上何も解らないんじゃないか？
と言う事だ。

今日ライルと戦ってみて解った事だが、何故か俺の身体能力は、俺の予想を遥かに上回る程、相当アップしていた。

恐らくその理由はこの村では調べようも無いだろう。

それに、メイの事も聖都に行かないと、本格的に調べられないとフアーナは言っていた。

俺がメイと世帯を持てば、メイの症状は大分治まる。

テレウスも、フアーナもそれさえクリアできれば、聖都に行けたとも言っていた。

だから、今すぐ行っても問題ないだろう。

俺自身の問題にしてもそうだ。

ならば、早く行けば行くほど状況は好転しやすいって事だ。
だから、俺は決意していた。

「メイ」

「なあに？」

メイは心配そうな顔をまだしている。

俺は多分顔を真っ赤にしているんじゃないか？

と思い、一旦両手で顔を叩く。

それと同時に早苗に謝った。

「メイ！」

「ん？」

「・・・好きだ！」

「えっ・・・？」

そこで聞き返さないで欲しい・・・

「好きだ！結婚してくれ！」

メイは無言。

どうやら突然過ぎたらしい。

完全に呆けている。

「えええええっ！！ななななに突然？どどっどつしたのマサミチ
？」

そっだよな・・・そう来るよな。

しかし、引いた引き金は戻れねえ！このまま行く！

「メイは！俺の事嫌いかな？」

「好きだよ！！」

即答来たあー！

「好きだけど・・・こんな、玄関先で突然なんて・・・」

「あつ・・・ごめん」

確かにムードもへったくれも無いな・・・

メイはクルツと後ろを振り向いて、部屋の中にパタパタと逃げる様に入ってしまった。

あゝあ・・・でも、顔真っ赤だったな、なんか嬉しそうにしてたし良しとするか・・・

顔に手を当てて嬉恥かしそうにしてたメイは、可愛かった。

俺のアホなプロポーズから、メイは部屋に入っただけで出てこなかった。

もう、テレウスが何時来ても良い時間だ。

俺は仕方ないと、自分の部屋から出てテレウスを待つ事にした。と、メイが部屋から出てくる所とバッタリ鉢合わせしてしまう。

「はあうっ！」

「よっ、よっ、メイ」

「うう~~~~」

メイは涙目だ。

あらしくったかな、やっぱ。

と、思っていると、真っ赤で涙目のメイの頬がプツクリ膨らみ、思いっきり平手が飛んできた。

避けられる！・・・でも、これ避けちゃ駄目だよな、とほほ

「バツチーン！！」

「いったゝい！！」

叩いたメイが大声を上げた。

痛いのは俺である。

「マサミチのバカあ！玄関先であんな事言つて！デリカシー無し！朴念仁！変態！色魔！バカバカバカバカ！バカーーーーー！！」

えらい言われ様だが、この場面は逆らう場面じゃない。

それ位は解る俺は、メイの罵倒を黙って聞いている。

「バカマサミチ。でも、嬉しかった。ありがと・・・私もここによ・・・」

「え？聞こえないぞメイ」

「へ？」

俺じゃない。

俺は『へ？』の方だ。

声の主は玄関の方、テレウスだった。

見るとファーナにぶっ飛ばされてる。自業自得だバカ兄貴。依頼主が邪魔してどうするよ？

俺はすかさずフロアに入った。

せっかく上手くいきそうなのに、アホなKY兄のせいでこのタイミングを逃してたまるか。

メイを抱き上げると俺の部屋にドアを蹴飛ばして入った。

「メイ！結婚しよう！」

メイはテレウスの登場に半ばパニックを起こしてるが、唇が触れ合う距離まで顔を近づけた俺は、メイの眼を真剣な表情で見つめた。

「は、い・・・」

メイはポーと頬を赤らめながら返事をくれた。

可愛いぞ！俺のストライクな反応だ！

思わず・・・キスしていた。

「んで？どうなったんだ？」

あれからメイはファーナと一緒に向こうの家に行っていた。

テレウスが部屋から出てきた俺達を見て、開口一番『結婚か？』と聞いて来た。

ファーナが二度目のストレートを見舞ったのは言うまでも無い。

メイは恥かしパニックと、嬉しパニックを起こしていたのでファーナが自分の家に連れてったのだ。

テレウスはファーナに張り倒された頬を摩りながら話を続ける。

「しかし、マサミチもいきなりだな。俺達に相談も無しに」

「いや、それは悪かったよ。でも、思い立ったが吉日ってね」

「うゝん意味は解らんが、説得力のある言葉だな」

「まあ、取り敢えずは上手く行った訳だな？」

「ああ」

「それなら良い。これからメイの事、よろしく頼む」

「任された」

「それと、さっきの模擬戦での事なんだが、ライルはどうも納得してない様だから、今後ちよつと煩くなると思つてくれ」

「それは困るなあゝ、まっ、向こうに行つちまえば関係ないか」

「まあ、樂觀は出来んがそうだな」

「あと、さっき言つていた忍術の事なんだが」

「そうそう、そう言えばこつちの世界にも忍術を使う者がいるのか？」

俺はもしかしたら以前にも異世界に來た人間が居たのではないかと思つていた。

忍びと言う位だから、恐らく昔の日本からなのだろうが、それを調べればもしかしたら元の世界に歸る為の情報が手に入るかもしれない。

だが、テレウス話を聞いた俺は少しガツカリした。

「ああ、東方の僻地に古くから伝わる武術を使つて、諜報活動をする集団が居たそうだな。しかし、それはこの世界のものだぞ？今も伝承されているからな。逆にマサミチがそれを使うと知つて俺は驚いてる」

テレウスの話だところだ。

ファアーナの住んでいた東方に赴いた時に、忍びの郷と言う所に立ち寄ったと言う。

そこでは肉体を極限まで鍛え、隠形を使ってありとあらゆる諜報活動を隠密に行うのだと。

テレウスもある縁でその隠形を習ったが、全く習得出来なかったらしい。

全くどれだけのつてを持つてゐるんだテレウス。

と、まあそいつは置いて、文献やら伝承がしっかりと2000年も前から残っているらしい。

日本で忍術は鎌倉時代位からだったと思うので、逆にこっちの世界の方が歴史は古かった。

偶然の一致では片付けたくないが、今すぐに調べる程の物では無さそう。

まあ、いずれ行く地として記憶の隅にとどめて置こう。

「偶然か・・・まあ、俺のこっちのとは名称だけって可能性もあるが、それでも驚いたぜ」

「そうだな、聖都に行つてからでも良いから。俺にも一度マサミチの使う忍術を見せて貰えないか？もしかしたら何かの手がかり位には、なるかも知れないからな」

「ああ、そうだな」

俺とテレウスの話はこれで終わりだ。

すると、まるで見ていたかの様なタイミングで、メイとファアーナが戻ってきた。

流石場を弁えてるなファアーナ。

少々タイミング良過ぎるが。

「お話しは終わった様ね」

見てたのかよ？と突っ込みを入れたくなる。

「ああ、終わった。ファーナの方も終わったのか？」

「ええ、メイと話し合った結果、私達は一週間後にアレサレナ聖都ファーンに行く事になったわ。あなたもテレウスもそれで良い？」

「ああ」

「そうだな、俺は引継ぎがあるからもう少し遅れると思うが、まあ、2・3日だろう」

「それなら問題ないわね。向こうに行ったら伯爵に会って諸々の手続きをするわ。それから内々でマサミチとメイの結婚式をするのは、一カ月後を予定にします」

なんと手際の良い事で。

流石はファーナと内心舌を巻く俺。

メイを見ると頬を赤らめてずっと俯いていた。あつ、眼が合った。あらら、手を顔に当ててイヤイヤしてる。

俺まで恥かしくなるじゃないか・・・なんだこのラブラブ状態は。

「よつよし、それでいいぜ」

「解った。じゃあファーナ、早速準備をしよう。マサミチとメイは取り敢えず一週間ゆっくり待っててくれ」

「うん」

「了解」

「マサミチはお勉強ね」

「うへえ」

「ちゃんと・・・勉強。しないとねっ」

ニツコリとメイ。つちよ・・・ヤバイにやける。早苗・・・ごめん。早苗に謝りつつ、ちよつと幸せに思ってしまう俺。

兎に角俺の新しい道が出来た。

これからは、メイとテレウス、ファーナ夫婦、それからまだ見ぬ伯爵。

聖都で出会った人々と共に、俺は、俺の道を歩き続ける事になる。

突き抜ける青空に、ゲコゲコとカエルが飛んでいた。

第一章 完結

第一話 一步一步進む道

1万年前

巨大な鉄製の扉の前に一人の男が立っていた。

輝く白銀の鎧を身に纏い、右手に幅広の長剣、左腕にはめ込み式の丸型バックラーを装着している。

男は重そうな扉の前で、靡く金色の長髪を剣で切ると、髪は床にパサリと散らばった。

「フェリス、君が綺麗と言ってくれた髪はこれから少々邪魔になる。切らせてもらったよ」

男は最愛の人の事を思いだし、少しの間宙を見つめると、今度は仲間^{アヒリテイ}の事を思う。

（やっと、やっと此処まで来れた。ランド、マリノス、クリステイ、フェノミナ、皆のお蔭だ。有り難う。・・・そして、きつと敵は討つからな）

彼はこの迷宮に一緒に入った仲間の死の間際を思い出して、ジッと目を閉じた。

ゼクス・ファン・クレイザード。人は彼の事を至高の勇者と呼んだ。聖人ラノアと聖女マリシアの間に生まれた彼は、その身に宿す巨大な魔力と、千にも及ぶ能力を持ち、人々からは生まれながらの勇者と称えられた。

人々は勇者の誕生を心から喜び、当時人々を苦しめていた魔物を倒してくれる期待に胸を膨らませていた。

しかし、魔王と魔神から生まれたと言われる魔神皇^{デイモスゴッド}が現れた事によ

り人々の期待は絶望に変わる。

魔神皇はゼクスの存在を軽視せず、真つ先に彼を殺そうと魔神軍を差し向けた。

幼い彼にそれに対抗する力はまだ無く、彼を守るもの達は全員殺され、両親も殺された。

そして彼自身も瀕死の重傷を負わされる。

しかし、それを天界から見ていた守女神アレクレアは彼を助けた。

その身を犠牲にして・・・

助け出された彼は死に瀕していたが、守女神アレクレアの妹、戦女神レクシアは彼を天界へと導く。

その後天界で傷を癒した彼は、天界の神々からの厳しい修行を終えて下界へと降り立つ。

そして彼は、魔神皇に征服された国々を次々に解放して言ったのである。

魔神軍との戦いは熾烈を極めた。

たった一人で戦う彼は、凄惨な戦いの日々の中で出会った一人の娘と恋に落ちる。

娘は英雄王バルバロスの一人娘、フェリス・ネイ・サクシードと名乗った。

彼女は皆に英霊の女神と呼ばれ、強大な滅魔の力を持って魔神軍と戦っていた。

フェリスは青い髪を腰で束ね、美人で愛くるしい容姿に均整の取れた肢体、誰もが愛する性格を持っていた。

そんな彼女に恋するなと言う方が無理な話。
フェリスも勇者と呼ばれたゼクスに一目惚れだった。

至高の勇者と英霊の女神。

誰もが似合いの最強カッパルの誕生に、人々は魔神軍は瞬く間に蹴散らされるであろうと思っていたのである。

戦いの中で何時しかゼクスとファリスも、人々のいう様に自分達の

力ならば、と思う様になって行った。

次第に追い詰められる魔神軍。

しかし、魔神皇メイガスはゼクスとフェリスの慢心による微かなの油断を見逃さなかった。

どうやったのかは不明だが、ファリスを誘拐して自身の持つ最大の迷宮へと逃げ込んだのである。

ゼクスはすぐさま仲間と共に迷宮「ヴァルガドルパレス」に突入する。

剣王ランド、英雄マリノス、聖女クリステイ、魔女フェノミナ。

一騎当千の仲間と共にあるゼクスは、凄まじい勢いで迷宮を突破していく。

だが、この世界で最強クラスの魔物と言われている幻魔獣達や、魔神皇自らが生み出した魔人達との戦いで、次々倒れていく仲間達。

劣勢に見られたが、彼らの尊い犠牲でようやく魔神皇メイガスの居る最後の間迄来れた。

後は魔神皇唯一人だ。

碧眼の瞳に青い炎を宿してゼクスは扉をジッと睨み、決意を再度固める。

（フェリス・・・必ず君を救い出す！）

ゼクスは高位魔錠解呪の呪文を放つと、四重呪式の組まれた扉がゆつくと開け放たれた。

開いた扉の先に玉座が見える。

そこに見える二つの重なり合う影から、聞き覚えのある美しい声が喘ぎとなって聞こえてきた。

王座に座るは魔神皇メイガス、そしてメイガスの座る上には、フェリスが座っている。

一矢纏わぬ肢体を曝し、形の良い胸の双球を縦に揺らしながら恍惚とした表情でゼクスを見ていた。

「・・・・・・」

ゼクスは眼を見開いた表情で目の前の光景が理解できなかった。

「よく来たな。至高の勇者よ。待っていたぞ？我が妻フェリスと共にな」

魔神皇がクククと含み笑いをしながら言葉をゼクスへと投げかける。ゼクスは言葉にならない怒りがこみ上げてくるが、それを押し殺して冷静さを保つ。

今冷静さを欠けば、巨大な敵を打ち倒す事は叶わぬ事をゼクスは知っていた。

自分が敗ればフェリスを救い出す所か、世界は滅ぼされる。と・・

だが、そんな彼を嘲笑うかの様な言葉を、なんとフェリスが発した。

「ゼクスう、貴方が遅いから、私はメイガス様の所有物にして貰ったわ。ほら、見て、貴方が欲しがっていた私の身体、全てメイガス様に捧げたのよ？フッフ」

フェリスの表情はあの頃と同じ愛らしいままだ。

が、その愛らしいままの容姿から放たれる妖艶な気配と言葉に、ゼクスの理性が切れた。

「メイガスうう！！貴様ああああ！！」

神剣ファルシオンを掲げて凄まじい勢いで玉座に詰め寄る。

と、玉座の一步手前でその勢いが封じられた。

「まあそう急ぐな、勇者よ。ファリスが今懷妊する所だ。それを見てからでも遅くは無かるう？ククク」

ぐぐががと、呻きを上げながら力を込めるゼクス。

その瞳からは涙が溢れ、口の端からは嚙締めた歯からの血が顎に伝う。

それを眼下に見ながらフェリスの縦の動きが激しくなると、次の瞬間系の切れた人形のようにガクリと身体が沈み、そしてスウウと消えていく。

「つがあああああああああ！！！」

それを見たゼクスの光り輝く白銀の鎧は、その輝きを失い黒い靄を発生させる。

「堕ちたか勇者よ。それで良い。これからは闇の女神フェリスと共に世界を闇に包め。私はもう・・・」

そこまで言った魔神皇は、ゼクスの漆黒と化した神剣ファルシオンに首を撥ねられた。

頭を切り離された魔神皇の身体から噴出す鮮血が、ゼクスの身体を朱に染めていく。

「・・・ククク・・・フフフ・・・ふはははは、あああはははははは！！！」

全身を紅に染めながら、精悍だった容姿を邪に変えて笑うゼクス。輝く金の髪が鮮血の赤色に染まっていく。

白銀だった鎧は漆黒に染まり、全身から邪悪な闇色の靄を立ち上らせていた。

この日、人々に愛され、神に祝福された至高の勇者は、闇に堕ちたのだった。

1万年後

《聖アレサレナ王国聖都ファーン》

「でけえ」

正道はこれから住む家、いや屋敷を見て口をポカンと開けて呆然としていた。

「すごいね」

隣にいるメイも正道と同じ状態であった。

正道達一行はアレから一週間の後、引越しをしていた。と言っても持つてくる荷物は殆ど無い。

メイは貴重品と、お気に入りの枕やマグカップやらぬいぐるみ等、身の回り品だけだし、正道にいたっては異世界に來た時着ていた学生服だけだった。

「しかし、こんなにデカイ屋敷に四人で住むのかよ？いらねーだろ」

呆然状態から立ち直った正道は玄関に歩き出すと、独り言の様に呟く。

「でも、貴族になるならお手伝いさんも一緒に住むんでしょ？何人か知らないけど」

それに一步遅れて付いていくメイが正道の独り言に答える。

「そうなのか？良く解んねーけど。まあ、お手伝いさんが居れば掃除の手間は心配ねーかな？」

そう言いメイに振り返りながら玄関のドアノブに手を掛け様とした時、不意に扉が開いた。

正道は驚いて反射的に顔を向けて、メイと扉の間に盾に成る様身体を入れて身構える。

いかに忍術の修行を積んでいて、最近不思議と力の底上げが成された正道も所詮高校生である。

常に気を張っている訳でもなく、また、気を張らなければ唯の高校生であつた。

訝しげな表情を浮かべている二人の前に、熟年の執事服を着た男性が頭を下げていた。

「マサミチ様、メイ様。ようこそおいで下さりました。本日よりサノクラ男爵家の執事をさせていただきます。レイ・マクドナルドと申します」

面食らった二人は本日二度目のフリーズ状態に陥った。

「・・・しかし、こんなにいらねーだろ・・・」

暫く呆けていた正道達は、執事マクドナルドに屋敷に入る様に促されて足を踏み入れ、又口を開けて整然と並ぶメイド服を着た女の子達を見ていた。

流石に今度はフリーズこそしなかったが、呆れ顔になった正道は一人呟く。

玄関から中央のデカイ階段に沿って中二階迄、中央を開けて両サイドに並んでいる女の子達は総勢50人を超えていた。

メイも驚いた顔でそれを見ていた。

俺達のそんな状態を見てマクドナルドが口を開く。

「旦那様、奥様。ファリス様がお帰りになられるまで、お茶をお飲みになれながらお待ちしてはいかがでしょうか？色々とお聞きになられたい事もおありな御様子ですが、まずは茶室へと御案内いたしますので此方へお越し下さい」

足を進めようとしないう正道達を見たマクドナルドは、主人を何時までもこのままの状態で居させる訳にも行かずに促す。

それにメイド達をこのまま整列させて置く訳にもいかない。

彼女らも忙しいのだ。

マクドナルドが案内してくれた部屋は、20畳程の部屋だった。中央に大きな丸テーブル、その周りに八つの椅子がテーブルを囲んでいる。

テーブルも椅子も高そうな造りであるのは素人目にもすぐに解った。壁を見ると大きなガラス窓がはめ込まれており、陽光を部屋の隅々まで取り込む設計がなされている。

その窓の向こうには見事な庭園が見えていた。

「旦那様、奥様。此方の部屋で当家自慢のラバーティをお楽しみ下さい」

マクドナルドが正道とメイの席を指し示すと、メイド二名がそれぞれの椅子を引いて主が座るのを待った。

正道達はくすぐったい様な表情を見せながら席へと座る。

すぐさま二人の目の前にティーカップが置かれ、そこにローズの香りのする紅茶が注がれた。

テーブルには、何時の間にか様々なお菓子が銀の大きな菓子受け皿に載せられている。

正道とメイはラバーティを一口含むと、鼻腔にほのかにラバー（バラ）の香りが広がり、口内にはほんわりとした甘みが染込んでいった。

「美味い」

「美味しい」

二人は同時にその紅茶の美味しさに唸った。

するとマクドナルドが満足そうに、執事の髭とでも言う様な口髭を一撮みしながら「恐れ入ります」と一言いうと、お茶請けもいかがでしょうか？と二人の前に小皿に数個乗せたクッキーを置いた。

二人はそれをそれぞれ口に入れると。

「美味い」

「美味しい」

余りの美味しさに同時に声を上げる。

（うん・・・此処まで完璧に相手のペースだな。まあ、俺のペースって状況今まで数える程しかないが）

などと思って心の中で苦笑しながら茶の時間を楽しんでいると、部屋の中にファーナが入ってきた。

「どう？二人とも」

入ってくるなりいきなり、どう？と言われてもどう答えりや良いんだよと思いいながら、俺はファーナを口をもぐもぐさせながら無言で見ている。

「凄いよ、凄く美味しいよこれえ」

メイがファーナにそう答えると、ああ、これの事をどう？と聞いたのか。

等と思い俺も言葉を口にする。

「ああ、凄く美味しいなこれ。結構高いんじゃないか？」

「ん？それ、テレウスが焼いたお菓子よ？フッフ」

[illegible]

俺とメイは同時に素っ 頓狂な声を上げて驚いた。

あのテレウスがお菓子を焼く。

この世界に来て一番驚いた。

メイも知らなかったのだろう、お菓子とファーナを交互に見ながら

口をパクパクさせながら何度もうーん、うーん、と唸っていた。

「恥かしいからメイにも食べさせた事はないって言ってたけど、聖都に住むならその内必ず口にするからって言って私が用意させたのよ」

その話を聞きながら、メイはクッキーをパクパク食べて「これ売れば良いのにね」と俺に向かって言っていると、ファーナから「あら、売っているわよ。結構評判良くて、既にブランド化してるわよ。結構高いんだからそれ」と言って近くに余ってクッキーを一撮みした。こうして俺の聖都生活第一日目はほのぼのお茶を飲んで終わりを告げた。

ファーナが明日は伯爵邸に行くから色々覚悟しててね。

等となんだか怖い事を言っていたが、俺は内心結構ワクワクしていた。

第二話 何だか騙された気分の俺の道

翌日、俺とファーナは伯爵邸に向けて歩いていった。

普通貴族は何処に行くにも馬車を使うらしいのだが、俺は元々貴族でも無ければどこかのお偉いさんでもない、ぶらぶら歩いていくと言ったら、じゃあ私も歩いていくわとファーナも言ったので、テクテク徒歩で向っているのだ。

「なあファーナ。伯爵ってどんな人なんだよ？いい加減教えてくれ」「会ってからの楽しみって言ったでしょ？」

俺は聖都ファーンの街並みを見物しながら、事前にある程度伯爵の人となりを数日前から聞いているのだが、ファーナは『お楽しみ』と言っているだけで一向に教えてくれない。

変人なのか？と聞くと、そうね、変人を超えているわよ？と言われたので、ますます持って事前に聞いておきたかったのだが。

「でも、いい人なのは間違いないから」とウインク混じりに言われる。

「じゃあ、伯爵はどうして俺なんか伯爵位をくれるんだ？」

「それも伯爵に会って直接聞いてって言ってたでしょ？」

直前に聞けば教えてくれると思ってた俺は、この状況を作って（目的地直前になって散歩の雰囲気作っての雑談）も教えてくれないファーナの態度に諦めて、仕方なく聖都の街並みを本格的に見物する事にした。

聖都ファーンは流石にそれえ首都と言うだけあって、その規模はかなりの物があった。

勿論東京や大阪、N・Yなどの超大都市等とは比べるべくも無いが、中世後期レベルの建築技術はあるらしく、デカイ聖堂やら高い塔（何の用途で使ってるかは解らないけど）が、結構距離がありそうなのここからでも良く見える。

街の彼方此方にある色々な店は、商店街とかがあるわけじゃなくて、街の大通り沿いに街全体に転々とあるらしい。

その売ってる物別に色分けされた店舗は、一箇所に集めると色々支障があるんだと、ファーナが言っている。

まあ、パンピーの移動手段に乗り合い馬車と言うのが有るらしいが、聞くと結構高いので普通皆歩きだそうだ。

商店を一箇所に集めると来るのに不便だな、と俺は思い。

そう言えば元の世界でも点在していたっけ。と思い、ファーナに変な質問しちまったと反省した。

「そうだ、ファーナ。店ごとに色分けしてあるって言ったけど、具体的にどんな店がどんな色なんだ？」

俺がそう聞くと、ファーナは丁寧に教えてくれる。

「そうねえ・・・」

食料品などを売っている店は全て白で統一されているらしい、食料品店は大きく分けて生鮮食品と保存食品に分かれる。

そして日用品などを売っている店は黄色。

武器や防具を売っている店は黒。

衣類等を売っている店は赤。なのだそうだ。

その他に、冒険者、傭兵、商業、魔法の元締めをしているギルドがあるらしく、それらは色分けはしていないが、建物に特徴があるから後で教えると言っていた。

その他にも道すがら聖都の事を色々と教えてくれた。

聖堂は誰でも入れるが、入ると物凄い勧誘を受けるから気を付けるとか、街の裏通りは結構物騒だけど、掘り出し物を売っている店が結構あるとか、デカイ塔は何個もあって、それぞれの塔は皆貴族が関っているので面倒だから登るなとか、ホント色々教えてくれた。正直言つて今上げた以外の事は忘れてしまう程だ。

まあ、あんまり俺に関係の無い話は、俺は忘れてしまう癖があるのから覚えてないんだけどな。早苗にもそれでよく怒られた。

でも、ファーナって東方の僻地出身って言つてなかったか？

幾らテレウスと結婚してこっちに住んでいるからって、変な裏話まで知っているぞ？

学者って言つてたからかな？とその時はそれで終わっただけど、伯爵と面通ししてからその疑問は晴れる事になった。

「ここが伯爵邸よ」

「こりやまた・・・」

デカイ。そう、伯爵邸はデカかった。

俺の屋敷と比較してみよう。

俺の屋敷は三階建て、伯爵邸は五階建て。

敷地面積は俺の屋敷が東京ドームを五分割した一つだとすると、伯爵邸は東京ドーム丸々一個分の広さがあった。

まあ、凡そなので大体だ。

「貴族の家って皆こんなにデカイのか？」

「うーん、皆って訳ではないわよ？伯爵邸級は聖都でも三件しかないわ。ちなみに私達の屋敷クラスは十三件ほど有るわよ」

「まあそうだな。こんな裕福を見せびらかした家がボコボコ建っ

てたら、パンピーは暴動起こしそうだ」

「パンピー？」

「ああ、こつちの話」

俺とファアーナがチャイム（ベル）を鳴らした後に玄関先で話をしていると、扉が開いて中から老年の執事が見事な姿勢と礼儀を持って迎えてくれた。

老執事に促されて中に入ると、ずらりと並んだメイド、メイド、メイドの行列。

これってこの世界では当たり前なのか？やだな

俺が自分の屋敷で出迎えられた時の三倍はいるであろうメイドの群れは、俺達に向かっていらっしやいませと言つと、一斉に深々と頭を下げた。

メイドカフェかつての・・・

げんなりしている俺をファアーナは肘でツンツンとしてくる。いけね・・・

「あゝ・・・私はマサミチ・サノクラ男爵である」

『そうこそファアーレン・ネド・シングウジ伯爵邸へ』

そう言つてメイド達はもう一度深々とお辞儀すると、サアアッと足早に引つ込んでいった。児童学会かつての・・・

ん？シングウジ？しんぐうじ？神宮寺？ハテ・・・？

それにネドって確か・・・

俺がまさか？と思つた時と、伯爵が現れたタイミングが同時だった。

「やあ、よく来てくれた。私がファアーレン・ネド・シングウジだ。よろしく、マサミチ・サノクラ君」

「ファアーナ」

「はい？」

「アレ、君の何？」

俺はファーナに瓜二つの《男性》を見ながらそう言う。

「私の双子の兄よ。黙ってろって言われてたの。ごめんね」

といって手を合わせて苦笑するファーナを見て、俺は頭が痛くなってきた。

【ファアレン・ネド・シングウジ】

東方僻地にあるシング国の第五王子だそうだ。

何で別の国の王子がアレサレナで伯爵してんだよ？と質問すると、彼、ファアレンはシング国王位継承権第八位で、国の政には殆ど関係ないらしい。

だが、上に何かあれば序列は上がる。

その為昔から、下位王位継承権持ちが善からぬ事を画策しないように、将来に向けて特典を与える代りに継承権を放棄する、といった様な措置を取ってきたらしい。

ファアレンには外交で会得した聖王国での伯爵の地位と、それに纏わる様々な特権が与えられていた。

今回俺が貰った爵位もその特権を使つての事らしい。

「あゝ、此度はどうも有り難う御座いました。会った早々失礼かと思いますが、今回私にしてくれた措置、私は何を持って返したら宜しいでしょうか？」

殆ど棒読みで、やる気の無さ全開の表情で、俺は鼻糞でも穿りながら言ってやろうかと思っただが、それは止めて言葉を向けた。

「ちよつとちよつとマサミチ、いきなりそんな言い方ないでしょ？」

ファーナが苦笑しながら俺の物言いに抗議を入れた。

言葉の口調から『無理ないけど』ってな感じが取れるので、俺は特に気分を害しては無いが、まあ、元々ファーナの兄上の顔見た時点で気分は悪い。

そう言えば、ファーナも王族だよな？

「ファーナ。あんたも同罪だぜ？俺はこう言うのは嫌いなんだ」

そう思つて口に出す。

だいたい最初から俺を嵌める気だったんだな。

あの良過ぎるほどの条件を出された時点で、気が付かない俺もアホだけだな。

「まあまあ、そんな気分を害さないでくれたまえマサミチ。仮にも私たちは家族なんだから、仲良くしていこうではないか」

ファレンが俺達を交互に見ながらそう言ってきた。

何時の間にか外野の位置に居やがるぞコイツ、しかも仲裁してきやがった。

解った解った、要注意人物筆頭と言う事で取り合えず仲良くしてやるよ。

「はゝゝゝ解ったよ。どうせ俺には他に頼る所も、頼る人もいねえからな。メイの事もあるし、仲良くしましょ。よろしく」

最後のよろしくだけ語尾を強めてファールンを見据えた俺に、ファールナが苦笑した。

「んで、義理のお兄さん。全部知っているんだよね？」

皮肉たつぷりに言う俺に、涼しい顔で近づいてきたファールンは、俺の肩に手を置いて微笑みながらこう言った。

「我が義理の親戚よ、妹からの報告は受けているから、安心してくれたまえ。なに、悪いようにはせんから、私のお願ひ、聞いてくれるね？」

皮肉に皮肉で返すなんて、結構子供じゃねーか。

俺はそんな返しをしてくるこの男を、少しだけ好感が持てた。根っからの悪人ではないらしい。

しかし、最後の言葉。お前は何処ぞの悪代官か？

「ぷっ……いや失礼。聞きましたよか。出来る事と出来ない事があるけどな」

「む……出来ない事は言わないつもりだよ」

俺とファールンは横並びに背中を向け、首だけ向き合つと、微笑みながら目を合わせた。

結構仲良く出来そうだ。

俺は心の中でそう思うと、今後の事を話しようとしてファールナに促されて、話をする為の部屋へと付いて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4422x/>

異世界へ放り出された俺の生きる道

2011年11月26日19時55分発行